

求道

第七
壹

卷
號



求道第七卷第一號目次

求道

◎他力の本意

自督

◎如上信人御墓及び唯圓房の遺跡

唯圓房の遺跡

岩船願入寺

金澤の道中

如信上人の御墓

山村の一泊

講話

◎無上淨信の曉

近角常觀

聖傳

◎デヤータカ釋尊傳

第一、久遠劫の昔

求道

第七卷
第一號

他力の本意

他力といふことは一往何人でも了解し易い様でありながら、眞の他力の味は中々分からぬ。普通他力といへば、他の佛陀を力として進むことである。と考ふるものが多い。成程他の佛陀に依る故に一往他力には違ひないが、夫を力として自己が進まんとする故に自力が雜りてくる。故に眞實の他力ではない、他力中の自力である。佛陀を理想とし、佛陀を標準とし、或は靜觀し、或は實行せんとするが如き皆是である。そこで絶對の他力といふことは、我方には何物もいらぬといふことである。と考へて、此儘で助かるのである。たゞのたゞである、悪くてもかまはぬといふことであるといふ様に了解するものがある。成程何物もないといふ意味に於ては絶對である、されど、此儘である、たゞのたゞである。と矢張自分できめ込むだけ、夫だけ自分に力が入りてある。夫故結局自力たることを免れざることは前の場合と全く同様である。

告白

◎遠慶宿縁

◎聞書

了信

歎咏

◎哀歌

増田甚

時報

◎昨年の求道講話

講話

求道學舍

毎日曜午前九時

毎土曜午後二時

第二 求道會

〔本郷森川町一番地〕

毎月二日午後七時

第三 求道會

〔日本橋蛸薬町説教所〕

已上の如き誤謬に陥るといふは畢竟他力に對する自己の態度に先づ着眼するからである。他力を信するものは他力自身を仰がねばならぬ。人より物を與へられたとき先づ之を受ける態度を如何にすべきかを考へたならば、丁寧にするも淡泊にするも眞の感謝を表することは出來ぬ。何より受くべき物夫自身、受くべき厚意夫自身を仰ぐべきである。かくすれば之に對する態度も感謝も直に眞情を發露し來ることになる、否眞情其物までが先方の厚意によりて發起せしめられたのである。

然らば他力夫自身の何であるかを仰かねばならぬ、親鸞聖人行卷に他力と言ふは如來の本願力也と仰せられた。是實に他力である。其如來の本願力といふは如何なることであるか。次の文に曰く、本願力と言ふは大菩薩法身の中に於て常に三昧に在し、種種の身、種種の神通、種種の說法を現じたまふことを示すこと皆本願力より起るを以てなり。譬へば阿修羅の琴の鼓するものなしと雖、音曲自然なるが如しとある。少しく此意味を明瞭にいたゞきてみよう。

抑々佛陀本覺法身の境界より我等十方衆生の有様をみそなはすときは、覺めたまうだけ夫だけ、無明の暗に眠れる我等

を哀み、了りたまふだけ、夫だけ三毒の酒に酔へる我等を憐みたまふ大慈大悲の御心は溢れ来るのである。是即如來の本願である。其本願を建立すべく姿をあらはしたまひし菩薩が即ち法藏菩薩である。而して五劫の思惟といふも、永劫の修行といふも、ひとへに此本願を成就するためである。かくして遂に正覺を成じたまひし佛陀の御姿が阿彌陀佛である。かく云へば恰も佛境界を掌を覗るが如く言ふ様にみゆれども、要するに本願力より顯現せられたる不可思議の事實である。唯之を信するばかりである。其本願力已上の事は知ることが出来ぬ、又本願力を信すれば何事も信せねばならぬことになる。然るに世人は其本願力が何故に存在するやといふ穿鑿心を起すものが多い、是は頗る無理な注文である。本願力を起し來る本覺法身の境界を知ることを得るなれば、既に佛になりて居るのである、然れば本願力の救にあづかるべき必要はないのである。唯信鈔の譬喩の如く、本願力は高き岸の上より我等を引き上げんが爲に下したまひし繩である。本覺法身は岸上の境である。我等十方衆生は岸下に苦惱せる人である。特に我等は岸下の衆生であることを忘れてはならぬ。然れば我等は本願力の繩已上の事は分かるべき筈もなく、又其已上を

前の譬喩を猶一度繰返して頂きてみよう。岸上より繩を下された本意は岸下に苦める衆生を救ふためである。しからば同し岸下の衆生の中でも最も危急なるものを最も至急に救はんとの願である。若し自分の力を以て岸に攀ち上るならば、一歩でも高きに上りたものが先づ助かるべきは當然である、即ち惡人なを往生す況んや善人をやである。然れども、岸上より繩を下されたときは一歩でも高きに上り得たものは後廻しにして、一歩も上り得ざる底下の凡愚を先とするのである、即ち善人なほもて往生を遂ぐ、況んや惡人をやである。此甚深の本願他力の本意をさかば我等底下の凡愚之を信じ奉らずには居られぬのである。

此歎異鈔の教化を深く味はしていたいた結果、遂に親鸞聖人の行卷に同意の文を二ヶ所まで見出すことを得た、如何にも難有き御文なれば之を申述べずには居られぬ。曰く、爾れば眞實の行信を獲る者は心に歡喜多きが故に是を歡喜地と名く、是を初果に喩ふことは。初果の聖者尙ほ睡眠懶惰なれども、二十九有に至らず、何に況んや十方群生海この行信に歸命したてまつれば攝取して捨てたまはず、故に阿彌陀佛と名づけたてまつる、是を他力と曰ふ。是實に他力の本意を示

知るべき必要もないのである、又知ることが出来るなれば本願力の顯はて下さる筈もない。故に他力と言へば本願力より始まるのである。強て言へば阿修羅の琴の鼓する者なしと雖音曲自然なるが如しである。自然といふより外はない。是即自然法爾の本願力である。唯不可思議といふより外はない。併其本願不可思議力の御思召は明らかに頂くことが出来る、否頂くことの出来る様にして下されたのが本願力の思召夫自身である。繩已上の事は分からねが、繩は攫むことが出来るのである、寧ろ攫ましむべきために下されたのが繩夫自身の意味である。

此に至りて初めて其本願力の思召、即他力の本意の何であるかを頂かねばならぬ。即ち歎異鈔に示さるゝが如く「罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんが爲の願にてまします」。猶一層適切に示されて「善人なをもて往生をとく、況んや惡人をや、しかるを世のひとつねにいはいく、惡人なを往生す、いかにいはんや善人をやと、この條一旦そのいはれあるにたれども本願他力の意趣にそむけり」とある。是實に他力の本意にして深き——思召の籠りたる所である、我等は此點を頂けば信ぜすには居られぬことになるのである。

されたる至極である。即ち佛の御慈悲をいたゞきたる一念、心に歡喜が溢る有様は恰も初歡喜地の菩薩が初めて佛の光を認められた歡喜と同様である。抑も龍樹は初歡喜地菩薩である、其歡喜地といふは大乗無上の彌陀の本願念佛を信じて慈悲の光を認められたのである。其歡喜地の有様を十住毘婆沙論に自白して説き使ひ睡眠懶惰なれども、二十九有に至らずと示されてある。してみれば彌陀の慈光は初果の聖者すら尙睡眠懶惰なれども二十九有の迷に退轉せしめたまはず、何かに況んや十方群生海、岸下に苦惱せる我等を觀そなはして、如何に愛慾の廣海に波没するも名利の愛波に惑溺するも一たび本願の繩に捕はれぬれば決して之を放ちたまふことなく必ず光明中に攝取して捨てたまはぬ。攝取といふは、此方より救はれんと求むるのではない、逃んとするものを追ひ捕へて、捨てたまはぬのである。夫故初果の聖者すら捨てたまはず、況んや生海苦海に沈淪せる群生に於てをや。是實に阿彌陀如來の眞體である、他力の本意である。

是は菩薩に比較して況んや十方群生海に於てをやといふ文である、同様に二乗に比較して況んや人天をやといふ文がある。曰く、願海は二乗雜善の中下の屍骸を宿さず、何に況ん

や、人天の虚假邪偽の善業、雜毒雜心の屍骸を宿さんや。是如來の本願海は聲聞緣覺の聖者すら其儘にとゞむることなく、自力の雜善をひるかへして、悉く慈悲海中に攝取したまふ。況んや人天の虚假邪偽の善業、雜毒雜心のものを其儘にとゞめたまふことあらんや。必ず不可思議の願海中に攝取したまひて功德の潮に一味になしたまふこと實に大慈大悲の御恵である。經に「聲聞或は菩薩能く聖心を究むる莫し、譬へば生れてより盲なるもの行きて人を開導せんと欲ふが如し、如來の智慧海は深廣にして涯底なし。二乗の測る所に非ず、唯佛のみ獨り明に了りたまへり」とあるは、畢竟菩薩も二乗も皆如來の慈悲に救はるゝことを述べたまふのである。「大乘は二乗三乗あることなし、二乗三乗は一乘に入らしめんとなり」といふも畢竟二乗も三乗も一乘、海に救はるゝことである。二乗三乗すら皆如來の救にあづかる、況んや凡愚逆惡をや故に「大小の聖人輕重の惡人皆同じく齊しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛すべし」と仰せらるゝのである。

かくの如き他力本願の本意を承りてみれば、我等是非しらず、邪正もわかぬ徒、唯偏へに信ずる外に別の仔細ないのである。「往生ほどの大事凡夫のはからふべきことにあらず、

虚設なるべし、力徒然なるべし、しかるに力願相加して十方衆生のために大饒益を成ず、これによりて正覺をとなへて、いまだ十劫なり、之を證する恒沙の諸佛の證誠に無虚妄の説にあらずや。しかれば御釋にも一切善惡凡夫得生者とらのたまへり」と口傳鈔に示された。これ實に行卷に論註を引きて本願力の徒然虚設ならざるを示され、執持鈔に同じく善導の御釋を引きて善惡凡夫の生るゝは大願業力なるを示されたまふと同意である。歎異鈔に彌陀の本願まことにあはしまさば釋尊の説教眞言なるべからず、佛説まことにあはしまさば善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことなれば法然のちほせそることならんや、法然のちほせまことならば親鸞がまふすむねまたもてむなしかるべからずさふらふかと示されたも畢竟此口傳鈔の御言の儘である。而してこれ黒谷、宗祖、如信三代傳持を初めとして傳燈相承したまへる本願他力の本意たるを思へば、我等實に此本願力に遇ひたてまつる宿縁を喜ばねばならぬ。

かく本願他力の本意を承ればます／＼我等はたゞ信ずるほかにか別の仔細なきなりである。法然聖人既に源空があらんところへゆかんとおもはるべしと仰せられたのである。とにかく

ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、すべて凡夫にかきらず補處の彌勒菩薩を初として佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす／＼如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり、之を他力に歸したる信心發得の行者といふのである。岸に攀ぢて、佛陀大覺の岸上に最も近きつゝある彌勒菩薩すら佛智不思議を仰ぎて他力に救はれたまふ、何かに況んや我等底下の凡愚佛智不思議をはからふべき、此の如き極惡深重の我等を特に憐みたまふ御思召、唯不思議と信じたてまつるの外はない。歎異鈔の善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや」といふことゝ、執持鈔の「補處の彌勒菩薩を初めとして佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや」といふことゝは、全く同一にして他力の本意と之を信じたてまつる有機である。

口傳鈔にも、特に本願寺の聖人黒谷の先德より御相承とて、如信上人おほせられていはくと云ふて、「善人なをもて往生す、いかに、いはんや惡人をやといふべし」とある。選擇集にも元曉の遊心安樂道を引きて曰く、淨土宗の意本凡夫の爲にして兼て聖人の爲めなりとある。「しかれば凡夫本願に乗じて報土に往生すべき正機なり、凡夫もし往生かたかるべくは願

く、源空は本誓重願虚しからずと信じたてまつりたる已上は、善いも悪いも知らねども、たゞ本願に順ひて念佛するばかりである。源空自身が參らせて貰ふなれば、ともかく源空の參るところへ參れば、いではなにかと仰せられて見れば、地獄であろうが何處であろうが本願を信じて法然聖人の御伴を申すばかりである、と親鸞聖人は仰せらるゝのである。欺かるゝも、虚言であろうとも更に後悔することはない、何となれば何づれの行も及ばぬ地獄、必定の無邊極濁惡の我身なれば、是より外に致方がないのである。其無邊極濁惡の我身を拯濟したまふ本願他力の本意、大興世の正意、三朝祖師の眞意を承りたる已上は唯信するの外はない。

唯信鈔に曰く、よの人つねにいはいく、佛の願を信ぜざるにはあらざれども、わが身のほどをはからふに罪障のつもれることはおほく、善心のおこることすくなし、こゝろつねに散亂して、一心をうることをかたし、身とこしなへに、懈怠にして精進なることなし、佛の願ふかしといふとも、いかでかこの身をむかへたまはんと、このおもひまことにかしこきにたり、憍慢をおこさず、高貢のこゝろなし、しかはあれども、佛の不可思議力をうたがふのとがあり、佛いかにかりのちか

らましますと。是如來の本願に對して、惡人なほ往生す、況んや善人をやの考をもてることを戒めたまひたのである。他力の本願に對して猶自己の力を揮はんとするものゆへ自己の力の弱さを悲むのである。繩に攀ちて自分が上らねばならぬと思ふゆへに、我身の重きことを歎くのである、誓願の繩は先方より我等を引き上げたまふのである。底下の凡愚、罪業深重の我等を引上げたまふが大願業力の思召である。是が他力の本意である。故に又曰く、佛力をうたがひ、願力をたのまざる人は菩提のさしにのぼることかたし、たゞ信心の手をのべて誓願のつなをとるべし、佛力無窮なり、罪障深重の身をちもしとせず、佛智無邊なり、散亂放逸のものをもすつることなし、たゞ信心を要とす、そのほかをかへりみざるなり。噫、信ずるばかりである。信ぜねばならぬのである。信ぜずには居られぬのである。信ぜずには居られぬやうにして下さる大慈大願である。何となれば罪障深重、散亂放逸のものほどたすけねばならぬといふが本願他力の御真意であるゆへに。此本願力の觀そなはずに遇ひたてまつれば信ぜずには居られず空しく過ぐることを出來ず。如何に逃げんとするも攝取不捨の御

力に捕はれて、能く速に功德大寶海を満足せしめたまふのである。是れ實に不可稱不可說不可思議の大信海である。南無阿彌陀佛。

謹啓什候。昨日は失禮仕り誠に恐れ入り候。愚生從來自己の價値なくして、もはや此の上は其の儘助くるぞ、汝一心正念直來の大悲本願招喚の勅命に信順するのみと思ひしも、やはり其の下には自身にて斯く知りし如く思ひ、此の儘に力を有し居り候處、(矢張り其の心中は難有くなかりき)段々と御教導に預り、自己の方は唯々我を忘れて大悲の勅命にお任せするのみと知らせて頂き、何となくも云はれざる味ひに立ち至り候。あゝ之只管佛陀大悲の致す所と、深く感謝し奉り候。あゝ此のまゝとは如來のお聲なりとは、今こそ明かに知られて、往生ほどの一大事、凡夫の計ふべきにあらず、唯一筋に如來の御誓ひに任せ奉るべしとの執持鈔の御ことは愈々ありがたく感ぜられ候。先は亂筆を以て御禮申上度く、此の如くに御座候。早々謹言。

一月十九日

岡山 正 意 拜

自 督

如信上人御墓及び 唯圓房遺跡參拜

○舊臘大草師を病床に訪ひて、話の末如信上人の御墓の事に及んだ、去る三十三年當時新法主として淺草別院に御修養をなされたる現今の法主臺下が關東の御舊蹟を巡拜しつゝ巡教あらせられた時御伴をして参つたが、水戸と宇都宮との中間にある山間に於ける金澤といふ小村落である、唯一本の木が御墓の標になつてあるばかりである、今てさへ交通不便の僻地であるが、寒中御弟子の所へ御説教に御出でになりて遂に御往生なされたのである。正月四日は御祥月御命日である、年々誰か参らねばならぬと思ふて居るが、土地の不便と松の内とである爲に其儘になつて居るとの話を承りた。

○偕つ／＼考へて見るに、現今歎異鈔が此の如く全國の信者に拜讀さるゝやうになつて居る、そして未だ如信上人の御墓が如何なる所にあるやら、如何なる様子であるやら之を詳

にせないといふは如何にも勿體ないことである、特に毎朝歎異鈔を拜讀して深き御恩を蒙りて居る自分自身が實に相濟まぬといふ感に堪へられなんだ、遂にい／＼御祥月に參拜することに決心をした。

○歎異鈔は古來如信上人の作として傳ふる所にして、亦何人の筆になろうとも、法照少康を善導の中に收むる如く、確に如信上人の信仰夫れ自身と頂いてよいが、歎異鈔の内容と亦離るべからざる關係を有するものは唯圓房である、歎異鈔中御弟子の名の出であるものは唯圓房のみにして、其尋も信仰上頗る肝要なる問題である、且語氣には動もすれば、歎異鈔は唯圓房の筆に成るやの感を深うせしむる次第である、私も六七年前より其考を持つて居たに、兩三年前出版された了詳師の開書の如きは唯圓房の筆と斷ぜられてある。

○夫故如信上人の筆としても唯圓房の御尋申せし次第を書かれたものにして、唯圓房の筆としても聖人の側に侍べりて如信上人の御聞きなされたことは口傳鈔によりて明らかである、されば如信上人の御墓に詣づると共に、亦唯圓房の遺跡を尋ねたいとの念が起つた。

○そこで唯圓房の遺跡は何れであるかを取調べた、唯圓房は

幾人もあるらしい、二十四輩には河井枕石寺の唯圓、鳥喰本泉寺の唯圓があるが、歎異鈔の唯圓は墓歸繪詞によるに阿和田の唯圓房に違ひない、水戸の近邊に阿和田の報佛寺といふがある、是が唯圓房の開基であるといふことである、道順であるゆへ先づ阿和田に参詣し、次に岩船の願入寺即ち如信上人の御寺に参詣し、最後に金澤の法龍寺即ち如信上人の御墓に参詣することゝした、別院から夫々其事を報じて呉れられた。

○一月一日に南條師に年賀に参りて承れば三十三年臺下御参拜の時隨行をせられたそうである、御墓標の木は銀杏樹であつて、其落葉を拾ふて歸りて今に保存して居るとの御話であつた、實に師が數十年一日の如く爲法不爲身の御苦勞は洵に感謝に堪へぬ。

○二日は日曜講話である、恰も講話の仕始めである、正月でも聴聞に来て下さる人が多い、難有いことである、其講話中に参拜の志を述べたが、勿論獨りて参詣の考であつたから、其積りて御話をした、講話後残りたる二三の人々が頗る同道を望まざるゝ氣色が見えてある、其志を察して同行しようかと尋ねたる所、欣然として喜色面に溢れ直に即決された、即

名念佛せられて切に道を求めらるゝ、氏の同行は参拜よりも寧ろ三日間起臥を共にして信仰を喜ばんと志である、竹原氏が頻りに宿縁を慶ばるゝ、永持君は始終満足無言の有様であつた、そして葦原氏が同氏の宅に居られし佐々木君の入信前の状態につきて話されつゝある時、窓外旭日輝きて林樾を照し、朝の空氣のすが／＼しき業垢消滅する思である。

○土浦を過ぎて遙に窓外に筑波山、加波山一帯の山脈を望み、特に板敷山の方角を考へて、聖人在世の昔を仰ぎ、亦十年二十年前各御舊跡を巡拜せし當時を回想して感慨頻りてあつた、私は筑波山に於ける聖人の筆の經石を捧持して居た故、之を取出して皆々拜禮した。

唯圓房の遺跡

○遂に水戸より一つ此方の停車場赤塚に着した、此所て下車して、河和田村を尋ねたる所、十五六町との事であつた、霜柱が立ちて歩る毎に鎖々として聲ありて森嚴の氣、身に迫る想である、七百年前聖人が往來したまひし土地と思へは林間の小路を辿るにつけても實に／＼懐しさに堪へぬ次第である。

○道に迷ふて一望の田園の間を彷徨し、恰も霜柱が解けて泥濘駄物を没し、殆んど雪道に苦む有様であつた、遙に見ゆる森

ち竹原嶺音氏と瀧澤三郎氏である、かくして居る所へ後ればせに葦原雅亮氏が参られた、即ち其事を申した所、是亦即席に同行を望まれた、私も大に驚きて、いやかくまで何れも即刻同行を望まざるゝ程なれば、定めて此事を早く講話の席で御話をしたら望まざるゝ人が多かつたであらうと今更残念に思へども詮方なし、後に第二求道會受持の小澤一君など聞いて残念がられて氣の毒であつた、學舎に冬休暇に居残られた人々に其由を傳へたる所、何れも頻りに往きたい志はあつたが、何分急であつたゆゑ、永持石之助君だけ同行することになり、愈々同行五人となつた、翌三日午前五時五十五分上野發の事に決定した。

○三日は暗さうちより準備を整へ、上野へ集つた、發車前に辛ふじて打揃ふた、急ぎて乗車した、汽車の窓外は猶暗くある、互に前夜の準備やら、辛ふじて間に合ふた話を語り合ふた、後に聞けば菅瀬芳英師が同行を思ひたちて停車場へ來られた所、恰も上野の鐘が六時を告げて、丁度汽車が出た跡であつたとの事、如何にも残念なことであつた。

○汽車は海岸線で水戸の方に向つた、三等列車に五人對坐して皆餘念もなく、信仰談ばかりである、瀧澤氏は間斷なく稱

を望みて進み、又間違つて亦尋ね、遂に一古寺に到りついた、是が即ち報佛寺である。

○住職は河田法弘氏である、我等を待受けて懇切を盡くされた、寺の傳ふる所によるに唯圓房は大部郷の平太郎の弟平次郎といふものである、兄は農となり、弟は獵師となりて生活して居つた、兄の如法なるに似合はず、弟は邪見にして法を信ぜなんだ、平次郎の妻が聖人の教を信じて二心なかつた、或時聖人の名號を拜して喜んで居る姿を見て怒て之を殺したる所、名號が身代りになつて下されたので、忽に迴心懺悔して發心したのが唯圓房であるとの事であつた、成程此の如き發心をした人ならば如何にも歎異鈔の如き罪惡救済の本願を喜ばるべき筈とも考へらるゝ、海川に網を曳き釣をして世を渡るものも、野山にしゝをかり鳥をとりにて命をつぐ輩も、商をもし、田畠をつくりてするひとも同じことなり、さるべき業縁の催せは、いかなるふるまひをもすべしとあるなど思ひ合ふことが出来る。

○されと墓歸繪詞には鴻才辯説の名譽ある人とあれば、普通の獵師風情とも覺えざる節もある、歎異鈔を見ればたしかに教行信證の眞髓をよく頂いた人たることは疑ない、されど自

分は謙遜して經釋のゆくちをも知らず、法門の淺深を心得わけたることもないとあれば學問はなれて全く自督の上より頂かれたるに違ひない、歎異鈔は教行信證にあらはれたる御自督を取繼ぎて下さる唯一の御手引である。

○報佛寺に於ける唯圓房に關する唯一の材料は、御本尊の御臺座の中にある板の中に當寺開基唯圓大德正應元年戊子八月八日と書して圓形に十代までの法名及祥月命日が記してある、是實に何よりの材料である、其他の一面には文明十三正月五日造之とありて當檀那春秋尾張守平朝臣幹勝とある、常陸國史にも此事は出てある、寺傳には唯圓房は九十六歳の往生と傳へて居る、慕歸繪詞には正應元年冬の比、唯圓房上洛して覺如上人に對面して御話をしたとある、此寺傳と對照するに冬は誤とせねばならぬ、此年は聖人二十七回忌の年にして唯圓房は九十六歳即往生の年に上京したことになる、其鏤鏤驚くべきの至である。

○寺傳に親鸞聖人七十歳の時唯圓房上京して聖人に御尋申したといふて居る、聖人七十歳とすれば如信上人は五六歳頃にして決して之を側にて承らるゝことは出来ぬことになる、寧ろ唯圓房七十歳の時とすれば聖人は九十歳御往生の時とな

守の城跡の如く傳ふる説あるも、寧ろ道場の跡といふ傳説の方が適切である、池畔の蘆や蔓草の實を摘みて昔を忍ぶ紀念とした、夫から住職に送られて道々唯圓房に關する追憶に耽りつゝ赤塚の停車場に着し、好意を謝して水戸に向うた。

岩船山願入寺

○水戸停車場より一行五人買切りのがた馬車にて夕陽の裡に喇叭を吹きて三里餘の田舎道を馳せさした、湊町に入り、大洗神社の森の側を沿ひて岩井町に着し、岩船願入寺の前に駐りたときは、日既に黄昏であつた、境内は樹木鬱蒼として廣々としてあれど、本堂は火災後割合に小規模である、一行が詣づる時恰も夕の參詣の同行が歸る時であつた。

○一月三日實に如信上人御祥月遯夜である、今や正に上人の御寺に詣づるを得た次第である、何たる深き因縁ぞや、住職は昨年寂せられて、院代が出て迎はれた、來意を告げた、御祥月は舊歷に勤めるとの事であつた、又正服焼香謹みて如信上人の御木像に拜禮勤行したてまつた、抑々如信上人が東山の名が慕はしいといふて住居せられた奥州大綱東山といふは今の白川關地方であるそふである、然るに數度轉地して水戸黃門光圀卿の時、由緒深き寺たることを知りて、此所に土地を

る、或は唯圓房の七十歳の時を聖人の七十歳と間違つたのであろう、勿論寺傳には歎異鈔は唯圓の筆などといふことは少しもないのである、併尋の内容は歎異鈔と合することになつて居る、勿論傳説ばかりで何の書いたものもない、住職の言によるに柿岡の如來寺に阿和田唯圓房の筆として親鸞聖人御往生の時上京して、御頂骨を持歸りた書付があるといふ噂である。

○一切の考證如何に拘はらず、阿和田といふ土地だけでも十分である、況んや其遺跡に詣て、當年を回想するときは追慕の情禁ずる能はざるものがある、白服黒衣を整へ御佛前に謹みて香を燒き、志を捧げ、一行嚴かに拜禮勤行したるときは唯圓房が我等に代りて聖人に御尋して下された昔を面り拜む心地がした、志渥き午飯をいたゞきて後住職の案内によりて寺を去る四五町の田中にあるドジョが池を尋ねた、今は鰯が池と思へども道場が池の訛て唯圓房の道場があつた所であるといふ、歎異鈔にあるひは道場へはりぶみをして云々である口調と何んとなく調子が合ふ心地がする、今では一反たらずの土地にして、而も池は其半分である、昔は石碑が建てられしも、今は池中に沈んで分からぬ、嘗ては松と杉と槐との老木がありしと傳ふる次第である、地名字彙には之を春秋尾張

寄附し、連枝地として、藩公の女を嫁はせ、今日願入寺を中興せられたのである、唯今拜しつゝある木像は光圀卿の直作である、溫平なる風丰自ら會祖聖人の俤を忍びて一層追慕に堪へぬ次第である、其他繪像等を拜したるも寶物は一切他に開張の爲に出られて拜むことが出来ぬ。

○かくて下向せんと準備にとりかゝるに、一旦散りし參詣人漸次集り来る、我等が參詣せしことを知りて法縁に遇はんためである、我等も實に其が志が嬉しかった、何んとなれば到處法義の枯渴せる常州に於ては實に空谷の聲である、これ恐くは上人が我等に法縁を與へんとの御恩であらう、前刻より一度拜讀したいと思ひつゝあつた歎異鈔の第二章を讀題とし平座示談にて聖人の御自督を仰ぎたてまつりた、毎日學舍佛前に於て拜讀せざる日なけれども、上人の御寺上人の御木像の前にて拜讀したてまつるといふは何たる光榮ぞや、來集の人々も大に感動し、亦同道の方々も思ひ掛けなき法縁に遇ふて、一方ならず喜ばれた、名殘惜しけれども翌日旅程の都合にて是非水戸まで歸らねばならぬため、馬車を待たせておきたゆへ愈々出立することにした。

○一見舊知の如く親しみ厚き參詣の同行に見送られて、がた

馬車の上で別を告げたときは覺えず涙が泛んだ、寒空に星輝き霜風肌骨に砒する間を一直線に水戸に向ふときは坐ろに聖人御化導の昔が偲ばるゝ、行くに車あり、眠るに宿ありてすら此の如くである、日野左衛門の門前は如何であつたであらう、水戸の停車場の宿に着きて駄馬き座敷に火すげ少し火鉢の周圍に寒むそうに團欒したるとき、恰も二十年前高等學校にありし時本多辰次郎兄と共に、御舊蹟を巡拜して恰も正月水戸附近に宿りし昔を思ひ出した。

○思ひ同らせば明治三十五年正月二日に稻田西念寺に泊まりて夢に御眞影を拜しつゝあつたが、喚鐘の聲に驚き寤め星を戴きて本堂に詣て御眞影を拜した、其時の詩を想ひ出す、

此地宗師轉法輪。

凜然猶覺有威神。

風霜一夜山房夢。

咫尺分明拜現身。

其時翌日稻田より水戸に向て歩行しつゝ、前夜古賀で除夜したときの感慨の作を推敲したときの一節を想ひ出す、

學途幾百折。東西猶迷岐。日暮前程遠。驚馬步遲遲。頼有

寸心在。白玉涅不緇。深藏不自售。千古任人知。疎狂吾忘

我。慷慨漫憂時。不啻吾忘我。復忘我翁衰。我翁年五十。

髮染兩鬢絲。山河三百里。遙遙兒心悲。一夜萬感聚。旅窓

間を超越して仕まつ、百年の歲月、昨日の如くである、華原氏が朗々と求道社説を朗讀せらるゝを聞きて覺えず涙を催ふした、竹原氏は歎異鈔を讀するゝ、瀧澤氏は一心に念佛せらるゝ、永持君は沈黙して居る、私は窓外の田園一望雪の如き霜に七百年の昔を偲ばして貰ふ、太田着の聲に驚かされて忽ち現代に寤めて仕舞ふた。

○停車場に出れば恰も消防夫の出整ひである、焚火をして數百人の消防夫勇まじき出て達、田舎ながら盛んである、太田は西山公の隠棲地とやら存外立派な長々しい町である、一人の質朴な同行が私に近角でないかとの尋、自分は歸願寺の同行であるとの事、當地歸願寺住職駒柵兼敬師は當地より金澤地方へかけての組長である、淺草からかねて本日金澤行の順路について尋ねて貰ふたゝめ、迎いに來て下さつたのである、とかくする中に師自身が迎いに來て下されて親切に馬車の世話して下され、かつ、歸路に當地方で傳道して貰ひたいとの熱心なる望、恰も舊の御正忌の季節であるゆへ、若し私が承知をするなれば、さきに過ぎし日野左衛門の御舊蹟たる枕石寺、辨圓の發心したる明法房の上宮寺等、二十四輩の主なる所に相談をして法筵を開きたいとの事、こは唯事ならずと又も

訴向誰。歎枕揮暗淚。剔燈賦古詩。

詩中の我翁も七年前に亡くなられた、そして自分が却て翁たらんとするも遠くもない、思へば其夜所も同じ水戸に宿り、たしか三日阿和田報佛寺に参りたのではなかつたが、かすかに門前の立石を記憶するやうである、十九年前の月も日も同じ正月三日、あゝ其時からの因縁であつたのか、曠劫多生の宿縁がありがたい、幾年後に亦同じことを繰返すやら、南無阿彌陀佛。

○入浴をすまし、晚餐を共し、同行諸氏の熱心にひきたてられて燈下に御恩を喜ばしていたゝいた、明日の準備にとて墓歸繪詞、最須敬重繪詞の如信上人の御傳を示しつゝ、夜半睡眠煩惱のためにさえられ、もはや法話しきれなくなりて、共に御禮をして安らかに枕についた。

金澤法龍寺

○四日朝早くより起きて朝食匆匆辛ふして太田鐵道の一番外車に乗り込んだ、水戸以北の御舊蹟は初めてである、停車場の道案内にて枕石寺附近の村落を眺めつゝ汽車は馳せた、丘陵の起伏、茅屋の其間に點出せる有様、聖人當年の圖を面り拜む心地がする、御舊蹟に對するときは知らず識らずの間に時

や心は直に七百年の昔に馳せ歸つた、しかるに先方の大遠夜として特に望するゝ八九日が求道學舎の土曜日曜講話日に當るものゆへ、残念ながら、此度は主なる目的の如信上人御墓詣でに止めて他日改めて再び當地方の御舊蹟に參詣かたゝゝ傳道することゝした、定めて聖人は又逃げたなと思召すであらう、しかし後の時機純熟を待つのは亦一入のたのしみである。

○太田から金澤まで山路街道十三里である、例の如くが、馬車の乗合である、暇さへあれば法話である、又折々は各々昔を回顧しての物語である、瀧澤氏の從兄の方が昔々信仰を勧められた昔話が出た、當時自分よりは、たしかに才幹少き人物が成効する故に彼さへ此の如く成効するもの、我が成効出來ぬ筈はない思うて奮闘をした、しかるに從兄のいふにはかく才幹のなき人が成効して、才幹あるものが却て失敗する、之を以て人生は人間の力ではゆけぬといふことを悟るべきであるといふ、當時の我には一種の消極退嬰としか思はれなんだ、しかるに一たび御慈悲を知らして貰ふて見れば、實に「かはりはてたる我心かな」である、昨冬も今では講話をきいて居るといふことを云ふて遣りたら、從兄はなにも言はず唯一言はある哉、といふて來た、正月三日中にかく心

安らかに旅をさして貰ふといふは、不思議ともく夢の様なことじやと話さるゝ。

○山間の驛場で午飯を喫し、ほや／＼蒸氣の上がりたる饅頭を各々頬ばりたるなど滑稽であつた、華原氏が福澤先生の話をせらるゝ、常に水戸の學生に對して論じて曰く、義公は英雄力を用ゐる所なくして學問に隠れたるもの、烈公に至りては馬鹿の骨頭、殖産を疲弊せしめて、國を貧乏にし、佛法を破壊して、人民を意地悪くし、口てばかり仁義を説きてよいざまじや、之に不服ならさこいと云はれたとの事、かく活眼達識の上より宗教に對しても大横着を言はれたるため大に惑はされたとして、親鸞聖人に對する批評を話さる、曰く、日本に於て一番ニライ人は親鸞聖人じや、其次は家康であらう、六尺もあつた大きい身體で、九十年も生きられたげな、オレも何まけるものかと思ふて居たが、トード駄目になつてしまつたといふて頻りに感嘆せられたが、或折には御前の宗旨の御先祖は一代の間唯南無阿彌陀佛／＼と難有そうに、ようも／＼あれほどよくも嘘が言へたものじやといふ調子で何分にも大横着を言はれるので、烟にまかれ何が何やら分からんやうになつた、今になつて見れば先生が存命中に一度歎異鈔を見せた

特別に参りましようといふ、何が何まで御用意をして引寄せ

て下さるか、徹頭徹尾他力の御恩を知らして下さるゝ。

○いよ／＼大子で乗つりぎの時は夜は星ばみて、寒天紺青の如くてある、肌にせまる山里の夜寒は亦一入である、今日てさへ、此様にして馬車や、道路の便があつてさへ、随分困難の山中へ、如信上人は六十有餘の御老禮で、しかも極寒の真中に、而も御身御一人てよく／＼も御苦勞下されたこと、我々踐む土地をふみしめて、是が御足の跡かなと、道の中にイミながら藥屋の燈火を眺めつゝ追慕の情やる瀬ない。

如信上人御墓

○此際上人御臨末當時の御有様を申述べねばならぬ、最須敬重繪詞に曰く、如信上人は奥州大綱東山といふ所に居をしめ給ひけるに、勸化に従ふ人、國郡にみち、徳行をあふくやから遠近にあまねし、爰にかの禪室をさること坂東のみち三十里、西の方によりて、金澤といふ所に、乗善房といふ人あり、本願を信受するこゝろ誠ありて、師恩を慚謝するおもひことねん／＼なり、これによりて正安元年癸卯冬二十日あまりの比、かの草庵に請したてまつり、晝夜聞法の益にあづかり、朝夕給仕の勤をぞいたしける、かゝるほどに年光はやくくれ

かつたと涙ぐまるゝ、先生に非常に寵愛された氏が、現今の信仰より師匠思ひの赤誠に覺えず胸せまりて顔をそむけた。

○さて溪に沿ふて段々と奥山の道をたどり、或時は馬車を下りて嶺を踰へ、或は宿場に馬車の乗りつぎをなすなど、さまざまの變化ある、旅である特に最も上りつめた嶺を長きトンネルにて通り貫ける時、御者の小僧が俄作りの松明を附けて馬の頭に先立ちて走り導く、あとに馬が勇みに勇みて驅けるなど、思ひ掛けなき山里の習慣に十二分に好奇心を満足せしめくれ、古き繪巻物の中の人となつた心地して、口々にコレハ面白いと評じ合ひて、さてトンネルを出てみれば、コハいかに一望の小丘眼下に起伏して、曠に田野の開けたる絶景、馬車は急坂を馳せて矢の如く下り、後を顧れば瀑布凍りて布を懸くるが如く一帯に眞白である、期せずして一同快哉々々を叫びつゝ、ア、難有御縁に遇ふが上に、かゝる景色まで見せて貰ふことの難有やと、亦一同稱名念佛の中に融けて仕舞ふ。

○乗合馬車は大子までしかないのである、そして大子で馬車はとまりである、日は全く暮れる、金澤まではまだ二里ある、ともかく四日の中に御墓に参らては御詳月御命日に参りた所詮を欠くといふもの、困つたと思ふて居れば、馬車の方から

て、暢春あらたに來けり、しかるに正月二日より心神いさゝか例ならずとてうちふし給けるが、それより後はひとへに世事の囂塵を抛却して、長時の稱名おこたり給はざりけるに、異香室の中に薫し、音楽窓の外にきこゆること二日二夜のあひだ、耳鼻にふれて間斷なし、かくて同四日己時に正知正念にして、つゝに稱名のいき止給けり、近隣の輩は瑞雲に驚てのぞみまふて、遠邦の族は靈夢を感じてはせあつする人もほかりけり」と。

○今此金澤の御舊跡に近きつゝあるのである、御墓の木といふのはどのやうなのであらう、何れ微かのものであらう、此様に夜になつて分かるのであらうか、提燈つけてゝも是非今夜の中に参詣せねばならぬ、身も心もちとみ上るやうに、引き寄せらるゝ心地である、もはや心が御墓に馳せて互に話をする餘地がなくなつた、皆々沈黙して、もう金澤か／＼と待ちかねて居る、一口二口言ふては稱名である、二里の間は何んであつたか、今に一寸とも記憶がない、冥々たる靈界を馳せて居る心持である。

○こゝが金澤であります、と別當がいふ、とうどきた、宿へつけましましかといふ、何れ五人が今夜泊るからと言ひあき

て、法龍寺までやれといふ、法龍寺が即ち乗善房の寺であるし、しばらくしていよいよ着いた、夜であるゆへし、かと分からねが、いかにも森々たる境内である、田の中にある森なれど、其時は山であると思ふて居た、其森の中を通りて小門の前に来た、實に森嚴の感に打たれて門に入るや否や眼前に鬱々たる大樹が居然として茂つてある、これはく／＼と如信上人に御目にかゝつた心持である、後に聞けば上人御手植のかやの木である、さてと思ふて左を見れば、天に聳ゆる銀杏の太木亭々として壯大の偉觀に、一同コレハとばかり期せずして其石牆の前に合掌禮拜して稱名念佛するばかりである、覺えず直に阿彌陀經を拜讀し始めた、皆共に勤めらるゝ、さて讀誦しつゝ見上ぐれば實に偉大とも／＼軀幹の大さ四圍は十分である、上に分れて六本程の心か並び聳え、勿論全く落葉してあるゆへに峭くして天を劈くかと怪まるゝ位である、其枝條の間に無數の星が燦然ときらめく有様、えも言はれぬあらたかである、御者は提燈をもて驚て見て居る、氣の毒とは思ひ乍ら、阿彌陀經だけでは物足らぬ心地して、ソレ／＼と直に正信偈如來大悲の和讃を誦し奉る、ア、何とも言ふべからざる難有ことである、今までは山中の孤墳を吊ふといふ様な考で小

さな墓木がある位な想像をなして居た所、豈圖らんや思ひ掛けなき壯嚴なる天然の御廟にて、覺えず殆んど御膝元に稽顙作禮せしめられた、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

○寺にも答へずに夜中に屋外に勤行するのである、寺は其聲に驚かされて起きて戸を明けらるゝ、かねての報知で待つて居て下されたのであるが、あまり遅きため如何と待ちわびて下さつたのである、導かれて座敷へ通れば、先づ拜するは楣間に掲げられたる法主臺下御染筆の寶海といふ御額である、三十三年御參詣の紀念である、床には南條師の詩が掛けられてある、親しく臺下や同師に御目にかゝつた心地がする、住職新田縁潤師は盛んに火を起し、茶を煮て下され、一同團樂して懇々と如信上人御臨終のことを説かれるのである。

○上人は大綱より年々京都の報恩講に御參詣なされたのである、そしていつも年内に關東へ御歸りなるのであつた、そして此所は當時の街道筋であつたのである、此年も十二月二十日御歸りがけに先の乗善房の道場、即此寺に御寄り下されて御化導下され遂に御病氣に御なりなされて御往生なされたのである、其時上人の御所持は鐵鉢の中に米が二合あつたばかりである、夫を皆が御粥にしていただきたところ 多人數が十分

いたゞいといふことである、そして遂に此に御葬をしたのが

なつた、それより已後御代々の御參詣のことは少しも傳はら

即此御墓である、そして上人の十三回忌に覺如上人が京都より直に此地に御墓參をなされ、御墓に御植をなされたのが彼銀杏樹であるとの話、丁度數ふれば六百年の星霜を閲して

ぬ、そして其後初めて當代彰如上人が御參詣なされた、年を數ふれば如信上人滅後明治三十三年まで滿六百年である、實に唯事ならぬことである。

○こゝで前の最須敬重繪詞の續きを見ねばならぬ、曰く、「これは奥州にてのことなれば尊者は知たまはず、のちにその告を得給てこそ、都鄙さかひのはるかなることゝいささらうらめしく、死生みちのへたゝりぬることゝ、悲の涙しのひかた

○明治二十三年本山にも初めて御墓あることが御分かりになりて、淺草より人が來て取調に來られた、其時道に迷ふて丁度今夜の如く夜着された、十年經て三十三年始めて御法主御詣があつた、又丁度十年經て今年貴方がたが參詣して下さつた。

入滅の忌辰に擬して五旬の徂景をかぞへ、百日の光陰を勘て一一の追善を修し、懇々の精誠を抽給けり、一廻第三廻までの恩業をば京都にてとりおこなひ給けるが、十三年は延慶五年に當たまひけるに、四年の冬の比、數州重嶺の雪をしのぎ、百州萬里の水をわたりて、まづ終焉の靈地をしたひ、かねさはの道場にいたりて、諸方の門弟をもようほし、追修の佛事をいとなみ給けり、それより大綱の遺跡にまうて、こゝにても一座の梵蓮をそのへられける、慇懃のこゝろさし鄭重のいたりなり」とある。

○さて話が進みて當寺はもと岩船願入寺の下寺であつたゆへ、如信上人御所持の鐵鉢は願入寺の方に移されしまふた、其時當寺安置の聖德太子をも同時に移したところが頗る重くして致方がなかつた、辛ふじて着したる夜の靈告に、我は金澤に緣あるゆへ返へせとありしゆへ、捧持して歸りたところ非常に輕かつたとの傳である、ところが不思議なる哉新田師自身が亦此靈驗なる事實を面り見せて貰ふたとの話。

○三十年前本山諸寶物展覧のありし時、船て御伴をしたが、往路は何んともなかつた、歸路に御伴をして北國御舊蹟を巡りて諸人に拜觀させんと思ひて、江州の湖を渡り、鹽津より、越

○二百年忌に蓮如上人が御參詣なされて關東御舊蹟御順拜に

前の方へ往くと、いかなる人夫も非常に重いといふ、定めて賃金を食ふ口實とのみ思ふて居るに、最後には厚志の人が擔ふてくれても重くて、遂に肩がすりむける位である、そこでフト古來の傳説を思ひ出して、コレハと感じ、翌日直に引返へした所、忽ち輕々として御歸りになつたと、住職感嘆の色面に溢れ、膝すゝめて物語らる。

○此靈像は太子御眞作と傳ふるので、古より此前に當る鎌倉が嶽の上に小さな堂に安置してありしが、如信上人金澤に御出での節、必ず參籠せられ、火を焚きて通夜せられたとの事である、黄門公が像に彩色を加へ、當寺へ移されたのであると、聞くや否や、私を御引きよせ下されたも皇太子の護持養育の御恩と知らしめようた。

山村の一泊

○夜はふけて話は盡きぬ、明朝改めて御墓に參詣して如信上人の御像に御目にかゝることゝして宿に下つた、今日は水戸已來精進をして居る、田舎山中の精進料理は一入結構である、入浴して、孤燈の下に集りて、今夜は歎異鈔を輪次に全編拜讀したつた、華原氏は、襟を正ふして眞摯なる尋をせらる、嘗て求道誌上告白に掲げたる佐々木博君が氏が宅にありて入

信の時、實にその廣大勝解なることに驚きた、自分は二十年來鎌倉にゆきて座禪をして幾分透關して居たのである、しかるに前夜まで煩悶して、譯の分からぬことを言ふて居た、佐々木君が慈光に接するなり、忽ちして歎異鈔の文々句々が分かりすぎて自分二十年來苦んで得た悟道の結果も、スバリ／＼と通り貫きて何の益にも立たぬやうになつた、全體自分が座禪をしたのも、畢竟他力を信じたばかりであつた、しかるに一朝かゝる不思議の事實を目撃して、殆んど爲す所を知らぬ次第である、明らさまに心中を告白して教を請ふとの事であつた。

○前刻より頻りに膝を進め、首を傾けてきゝて居られし瀧澤氏は口を開きて、實に私が問ひたい所を恰も問ひて下されたと迫りて尋ねられる、亦私は一度座禪の實驗のある人が他力信心の有様を如何に見らるゝかを知りたいと思ふて居たが、實に我聞たい所を開かして下さつたと感謝せざるを得なんだ。

○私はかく答へた、貴方が其事實を目撃して實に不可思議と仰がれたが即ち貴方の信心が起りたのじや、言ひかゆれば佐々木君の入信は人の事ではない、貴方にとりては佛が直々貴方に向ふて佛智不思議を示されたる御恵である、他人の入信

を見て我も此の如くならばやと期すべきではない、期するといふことが何より悪い、其不可思議の事實は、とても／＼座禪も觀念も及ぶことではないと佛智不思議を信ぜしめたまふたのである、信卷大願海の釋に、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず散に非ず、正觀に非ず、邪觀に非ず、有念に非ず、無念に非ず、唯是れ不可思議不可稱不可説の信樂なりとあるがこれである、補處の彌勒をはじめとして佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす／＼も如來のちかひにまかせたてまつるべきなり、と。

○そこで一同彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をばとぐるなりと信じて、感謝の情たを難く、稱名念佛するばかりである、瀧澤氏はまさかの用意にとて持來られし餅を火鉢に炙りていたゞいた、ア、待ちに待ちたる如信上人の御墓に參りて舊臘以來の志願を満足させていたゞき、又同道の方々も其目的とせられし信仰上の不審も晴れて、皆々荷物を下した心地して枕を並べて眠についた、山村の茅屋、蒲團は薄けれど厚き上人の遺徳にはぐ／＼まれて夢願の圓かであつた。

○夜は明けた、洗面に出た、柴門曉に出づれば、霜、雪の如くである、殘燈の下に朝食をすまして改めて法龍寺に參詣した、

今朝は白服黒衣威儀を正しくして、持來たせる香と志とを捧げて銀杏樹下に壇を設け、嚴重に再び勤行したてまつる、聖人御往生の昔を回想して上人の御やるせなき御思召を仰ぎたてまつり、つゝしみて墓前に歎異鈔を拜讀したてまつる、曰く、

露命わづかに枯草の身にかゝりてさふらふほどにこそ、あひともなはしめたまふひと／＼も御不審をもうけたまはり、聖人のおほせのさふらひしおもひきをも、うしきかせさふらへども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてさふらはんずらめとなげき存じさふらひて、かくのごとの義どもおほせられあひさふらふひと／＼にも、いひまよはされなんどせらるゝことのさふらはん時は、故聖人の御心にあひかなひて、御もちゐさふらふ御聖教どもをよく／＼御覽さふらふべし、乃至かなしきかなや、さいはひに念佛しながら、直に報土にむまれずして邊地にやどをとらんこと、一室の行者のなかに信心ことなることなからんためになく／＼筆をそめて、これをするす、なづけて歎異鈔といふべし、外見あるべからず。

○其側に横向きに乘善房の墓がある、亦つゝしみて偈文を誦

して、報恩の微志を表した、勤行了りて銀杏樹下にすめば落葉地に委して一面に黄金を散らした如くである、乃ち小石と共に之を拾ひつゝ俯仰低徊去るあたはぬのである、御木像を開扉するとの事で、やうやく、御堂に入つた、是亦黄門公の作にかゝる塑像である、御形は願入寺のと全く同様である、終焉の御舊蹟て又御姿を拜するを得るはよくの宿縁である、さて次に聖徳太子の御像を開扉せられた、實に顔容端嚴何んとも言語に絶したる靈像にてまします、天平の吉祥天女像等の形と酷肖してある、一同稱名念佛多生曠劫の哀愍攝受を感謝したてまつる。

○住職が我等が参詣したことを非常に喜びて紀念の爲に揮毫せよとの望にまかせ、前記の歎異鈔の文と磯谷御廟の偈とを書きた、約束の乗合馬車は、はや大子より來りて門前に待つて居る、そこでいよく別を告げねばならぬ、住職が再會は期しがたい御淨土といふ挨拶にほろりとした、御墓を伏し拜みいそぎ出て馬車に乗れば、鞭ふりあげて喇叭を吹きて喜連川に向ふのである、法龍寺の森は田園の中に漸次遠かり去つた、眼を凝らして眺むれば、最後まで銀杏の樹が残りて遂に霞に消えて仕舞ふた、ア、難有い、南無阿彌陀佛。

「彌陀たのむ人は雨夜の月なれや、雲隠れつゝ西へこそゆけ、」永持君懽爾として難有といふ、瀧澤氏かく五人が三日間貴き旅をしながら一人でも邊地に宿をとりては残念じやに、かく一室同心の友としていたゞいて難有いと徹頭徹尾歎異鈔旅行である。

○宇都宮で辨當を買ふたが四つしかない、三等室の一隅に五人が團欒して共同で頂いて仕舞ふた、粒々皆南無阿彌陀佛である、小山で昨夏稻田参詣の時泊りて一家の者を待受けた宿を車の窓より眺めつゝ、稻田の空を仰ぎながら歸心矢の如く、汽車は上野につきた、時正に十一時四十分である、九日日曜講話の再會を約しつゝ三日間の法悦と、紀念の銀杏の葉を土産として各々家庭に向ふた、一河の流、一樹の蔭、皆過去世の宿縁ならぬはない、況んや三日の巡拜に於てをや、茲に悲喜の涙を抑へて惜しき筆を留むるのである、南無阿彌陀佛。

○昨日までは道中信仰談をしても、上人の事を想ふても目的の御墓に参らぬ中は胸にものがかへたやうであつたが、もはや思ひおくことなくなりて胸すがくして何でも話したくなる、とかくする裡に雨が降り出した、満足して眠る人もあれば念佛する人もあり、歎異鈔を讀む人もある、私は頻りに歎異鈔につきて色々のことを考へて冥想に耽りた、午飯を喫したり、喜連川より氏家まで人車鐵道に乗りたり、旅の趣味なか／＼深かつたが、もはや満腹して一々書く元氣がなくなつた、氏家停車場の爐畔に團欒して一時間程列車を待ちつゝ、各自歎異鈔に紀念の爲に互に署名した、

○汽車に乗りて、満足の聲ばかりである、始終沈黙して居た永持君までが昨夜の信仰談に感動して、自分が歎喜の心が起らぬことを苦にして尋ねられた、同君の如き人が口を開くといふはよくの事である、そこで親鸞もこの不審ありつるに唯圓房おなじころにてありけり、昨夜諸氏の御尋と同様である、實驗せんと期するのでもなく、喜ばんと期するでもない、喜ぶべきことを喜ばぬにて往生は一定である、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおぼせられてみれば其仰を仰ぐばかりである、喜ばれぬのも煩惱、明らかならぬも煩惱、

講話

無上淨信の曉

《求道學會日曜講話》

近角 常觀

今日の題は、『無上淨信の曉』といふのであります。之は親鸞聖人の『略文類』の中にある言葉で、必ず無上淨信の曉に至りぬれば、三有生死の雲晴れて清淨無碍光耀朗かに、一如法界眞身顯はる。といふ御文から來たのであります。

さて今日此の題でお話せんと思ふ事は、信仰上夜が明けぬは人生の事は皆な暗みである。此の信心の夜が明けて其の曉に達した處で、人生悉く是れ光明となるのである。即ち此の信心の夜が明けると明けぬによりて、此の世の中が明と暗とに別れるのである。夫故信仰上に於ては、此の曉に達して夜の明ける處が一番肝心なのであります。處が近頃社會の様子を氣をつけて見るに、此の人生の暗みと信仰の光との間が、近頃は實に際どく接觸し來つたやうに感ぜらるゝのである。今日は此の點に就きてお話して見やうと思ふのであります。

夫は何かと言ふに、從來信仰といふ事を、動もすると唯自分の心の上にて有難く思ひ美はしく感じ、心を休めて心中の平和を保つといふやうに、唯一應の心の慰めとして喜ぶやうに思つて居た人が多かつたのである。處が色々人生の波に出會ひて、自分の心でこしらへて居た信仰や、自分の氣持で喜んで居た喜びでは間に合はなくなり、恰も眠りより目醒めた、といふ氣味が近頃社會の各部面に見えるのであります。之は茲へお出下さる人々には言ふ必要は無けれども、社會の上では確かに多いのである。斯ういふ意味で社會一般の形勢が、近頃は信仰より打離れて、人生の事は矢張り人生の道でなければいかぬといふ風に成つて來て、或は物質、或は經濟、或は事業、種々各方面の上に一般の眼光が實行的方面に向つて來たのである。私も此事は久しく氣附かず居たから、皆さんも氣が附か無つたらうと思ふのであります。

偕て斯くの如くに一體に自分の心でこしらへて居た信仰は碎けて仕舞ひ、信仰を差措いて他方面の研究に向ふといふ有様になつて來た。夫なら夫て光、安心が見えるかと言ふに益々光は見えず、益々先きは渾沌として分がらぬのである。此有様は何と言はうか、善く言へば今迄よりも眞實になつたと言はうか、一應の氣休め信仰では間に合はなくなり、眞實安心の物を攫み度いといふ傾向は誠に善いやうであるが、一も二もなく信仰ではいかぬといふ傾向は、益々信仰より遠ざかるものと言はねばならぬのである。彌々今度こそ眞實の信仰に氣附かねばならぬ時であると思ふのであります。凡て世の中の事は何事であらうが眞實の信仰に入らぬ間は、如何なる道に

によりて心をなだめて居たのが、人生上の苦味の爲に今は夫に打ち勝つ事が出來ず、種々なる社會の事情の爲めに諸方面に苦しんで居るといふ有様である。して今現に試みつゝある凡ての道、凡ての考、何れの道に到つても眞實安心の道が見出せぬといふ有様である。

其處で一つ氣附かせて貰はねばならぬ事は、今申す如く何れの道に行きても駄目である。夫れならば外に道があるかといふに、道は無い、彌々仕方が無いと窮まつたのである。其處で彌々仕て見様が無いと思ふて居る人もある。まだ其處に氣の附かぬ人もある。氣が附かぬと思ふて居る人もあれば、駄目な事を駄目とも思ふて居る人もある。色々あるが結局突き當る先きは決まつて居るのである。茲で彌々信仰に入らせて貰はねばならぬ時であると思ふのである。分り易く言へば今こそ眞實信仰に目醒めねばならぬ時であると思ふのであります。以上は近頃の社會の有様につき申したので、共に慈悲を喜ばせて貰ふて居る間では、門外の話をした様であります。去りながら此の儘が直ぐ信仰の問題である。茲で直ぐ喜ばせて頂き度いと思ふのであります。

偕て彌々喜ばせて貰ふのは何であるか。實に易い事で此程易い事は無い。段々申すが如く人生が迫つて來れば來る程夜が明けるには近いのである。我々は迫つて來て初めて驚くのであるが、實は人間の價值として然らざる可きものと昔から分つて居るのである。人間は衣食ばかりで行ける者では無い、生きて居る人間には必ず終りが有る。過去の因縁であれば如何なる所に墮ち込むとも夫は寧ろ當り前である。斯くちやん分

通りても眞實の安心、眞實の光は見えぬのである。

以上は際を立てる爲に申したのであります。世の有様から申しても近頃は衣食に窮し物質の缺乏を訴へる人が多いのである。此等の人は衣食を給し物質を與へられれば満足が得られるかといふに然うでない。眞實佛の光に氣が附く迄は其與へらるゝ物を受くる事さへが出來ぬのである。或は其の爲に生を支へる事は出來るかも知れぬが、設へ生活が出來ようと、又死活に迫りて居らうと、眞實其人の心に光が顯はれて來る迄は、眞の意味にて救はるゝ事は無いのである。人生上自分の居場所を求むる事にしながら、決して人間は其の境遇の上から眞の安心が得られるものではない。自分の生活上周囲の事情に不安を感じて、此の場所はいかぬといふて第二の場所に移るとする。第二の場所に移つて眞の安心が得られるかといふに、第二の場所に於ても矢張り同様の苦しみである。人間は場所を代へる事によりて安心が得られるて無く、其場所其境遇其儘に於て安心を見出さねば駄目なのである。決して場所や境遇を代へる事によりて安心が出來るものではないのであります。

最も手近な衣食住の上より言つても斯くの如くである。其他人人生上凡てが斯の如くである。人間は之ならば必ず安心が出來ると思つて居る道でも、其道から安心を得る事は決して無いのであります。學問上に於ても種々研究の結果修養の結果、最後の光は迎へ見出す事が出來ぬ。我々は如何なる道を辿りても眞實安心の道は無いのである。て丁度今日の有様は一時は社會一般が姑息なる安心(甚だ善くない言葉であるが)

つて居るのである。分つて居ながら徒に諸方面に手を出して悶え苦しんで居るのが今日社會の有様であります。否實は今口ばかりでは無い、曠劫以來の有様が皆之である善導大師のお言葉には

我が身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁ある事なしと深信す。

と仰せられ、又『和讃』には
濁世の起惡造罪は、
暴風驟雨にことならず、

諸佛これらをあはれみて、すゝめて淨土に歸せしめり。と仰せられた。罪惡生死の凡夫といひ、暴風驟雨の世の中であると言ふと、佛教の常套語のやうに思ふて居るけれども、實際此の世の中が修羅叫喚の巷である。

夫故茲で一つ筋を分けて氣をつけさせて貰はねばならぬ。「人生は皆な恵みである。其のやうな淺ましい事その様な邪見な事を言ふては無い。皆な恵みの中に居るのだから満足させて貰はねばならぬのである」と、何程人が申された處が眞實其の人の言ふ處と自分の心と違ふのだから喜ばふと思ふても喜ぶ事は出來ぬのである。何れ丈けも恵みと思ふて見ても、眞の安心はゆかぬのである。夫故今迄心て何程満足して居ても、いざ人生の實際に突き當り、いかぬとなつて來たのである。

之をばもつと際どく言ひますと、各個人が此の人生上に動いて居る有様は、古の所謂算を亂したが如き有様である。恰も箸をばら／＼に撒き散らしたが如く、前後左右各自色々に向きあつて居るのである。人間の思ひは皆な撞着矛盾、色々

になつて居るのが人生の實際である。夫れ故此の世の有様は自分ばかりで言へば、甲と乙とは心が違ひ立場を異にし境遇が異なつて居る。一方を善くする爲めには他方が善くならぬ。人を善くする爲には自分が倒れねばならぬのである。斯くの如く撞着矛盾して居るのが此世の實況である。如何に喜べと言はれた處が、事實世の中が此の通りで有つて見れば、喜ぶに喜んで見様が無い。如何に自分を立てやうと思ふても、立てるに立て、見やうが無いのである。此の有様を實際に目撃すると實に何とも言へぬ淺ましい有様である。斯くなると自分の標準をきめて居る時は諸方面へ皆な衝き當る。先きへは一步も動けぬやうになるのである。夫れなれば自分を措いて人に従ふかといふに、甲と乙とが善くすれば直ぐ又丙に悪しくなる。丙に善くすれば又乙に悪しくなるといふ有様である。斯く言へば人生の實況、物質上精神上如何に淺ましいかが分るかと思ひます。

先達でも學生の一人が信仰を求めて言はれた御文がある。私も氣がついて今更の如く喜ばせて貰ふた事である。夫は何かといふに親鸞聖人の『化身土卷』の御文に、

然れば夫れ楞嚴和尚の解義を按ずるに、念佛證據門の中に、第十八の願は別願中の別願なりと顯開したまへり。觀經定散の諸機は極重惡人唯稱彌陀と勸勵したまへるなり。濁世の道俗善く自から、己が能を思量せよ。云云

實に有難い御文である。何うかと言ふに『往生要集』の中に源信僧都が示された言葉の中に、第十八願は別願中の別願なりとある。抑々佛が大悲の御眞意を示し下されたものが此

ぬ人間、衣食に意味を見出す事の出来ぬ人間、互に相争うて生きて居る人間、實に此の人間は人を食ますんは我死すといふ有様で、逆も此のやうな人間が眞の生活眞の目暮が出来よう筈が無い。約まる所何一つ出来ぬといふのが人間の窮極である。抑佛の本願の起る大もとは之をもととしてお起し下されたのである。之が人生上實に大きな出来事で茲を能く聽かねばならぬのである。

悲み悶えて居る我々に直ぐ慈悲に満足せよと言はれた處が、夫は出来よう筈が無い。然るに佛は其の泣き悲んで居る有様を御覽下されて其者が可哀相である夫が少しも無理でない、四方八面皆塞がつて居る實に哀れな人間であると、此生死の海に沈んで居る互をば觀そなはし下さるのである。如何にも五逆十惡の衆生である、其罪の深いのが哀れてあるといふ廣大の慈悲である。其極重の惡人、何れの行も絶え果てたる者をば哀はれと御覽下さるのである。而して其者をば皆悉く救はねば措かねとある大慈大悲の思召が即ち御本願である。茲はうつかり輕ろ／＼と聞いて仕舞うてはならぬ。本願をばちよつと向ふの方において此方で氣休めに喜ぶやうなそんな輕ろ／＼した話では無いのである。此の困つて居る人間をば豫て哀れと御覽下されたのである。其何れの道でも到底行けぬ者故其の深い人間、其の一切の佛に見離された人間、其の撞着の人生に泣き叫んで居る人間、其者が可哀相である。此者を佛の境界に引き入れずば自分が佛とならぬとお誓ひ下されたのである言換ふれば自分が彌陀と姿を示し現はれた上は、如何なる極重惡人も皆な悉く苦境より引上げて

の第十八願である。『觀經』の中には定散二善を説かれてあるが、佛は此等を以て結局の目的と爲給ふのては無い。『極重惡人無他方便唯稱彌陀得生極樂』で、仕て見様な極重惡人が眞實の御目當である。定散二善は我々が其の極重惡人なる事を知らしめんが爲にお説き下されたものである。我々は自分て筋道を立て、行けるとか、自分てやつて行けるとか、そんな立派な人間ぢや無い。實に仕て見やうなき其の極重惡人である。故に『濁世の道俗善く自から己が能を思量せよ』である。此道てやつて行かうの、斯ういふ風に仕て行き度いのと、そんな事言うたて出来る我々ぢや無い。『善く自ら己が能を思量せよ』とは、如何にも能く五濁惡世の有様を指示下された御言葉であると思ひます。さて彌々どの道とりても行けぬ我々である、仕て見様の無き極重惡人であると決つた時は何うするか。茲て頂かねばならぬのが彌陀の御本願である。我々如き惡人は、何程其境遇に満足せよ、自分の境遇に不平を言ふて無いと、言はれた處が善く思へる様な人間では無いのである。

二

さて其の彌陀の本願とは如何なる本願であるか。『歎異鈔』には宣はく、

彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがため願にてまします。云云。

茲を能く頂かねばならぬのである。も一つ之を實世間上の問題に引きあて、言ふ時は、我々安心しては一日も生活の出来

樂にしてやらねば措かねと、此の算を亂して苦しんで居る私の上に、其事をばかねて御承知の上から、お呼び懸け下されたのである。其の廣大の心が即ち本願であり、其佛のお呼聲が南無阿彌陀佛の念佛であり、其のお姿が阿彌陀佛である。遠き古へより今日今時に至る迄佛は常に斯く呼びづめにして下さるのである。此の廣大の呼聲、此の廣大の御心無くば如何にも此世は衝突の人生、撞着の人生で、如何に周圍を眺めた處で此世が喜べよう筈が無い。其の喜べぬ事を佛は豫て御承知下されて、其の喜べぬ奴目が哀れてあると、現はれ下されたのが彌陀の日光、彌陀の佛目である。我々は平素頂く方にばかり心を盡して、其の頂く可き御本願が是れ程廣大の御本願である事に氣がつかぬ。自分の頂き心ばかりに苦心して、自分の心が樂になつた事を以て喜んで居る様では、まだ此の廣大の御本願の眞意は頂けて居無いのである。我々は何うかして如何なる譯で佛がましますか、夫が知り度い、佛のお姿を目にも見度い、心にもハツキリ頂き度いと思ふ者が多いのであるが、夫が此方て分る位なら、お救ひに預る必要は無いのである。まだ此方の物差で行けるやうに思つて居るのは、まだ善く自分の能が分からぬからである。然るに其の者を救ひ、其の者を見捨てぬとある大慈大悲の佛である。前後左右ばら／＼に向いて居る人間、逆も一方角には向く事の出来ぬ人生に對して、其の様が可哀相である、其の者が不慮であると御覽下されて、皆一樣に如來の大慈大悲の大道に歸入せしめ下さるのである。其の一方角に向ふのは、此のばら／＼の十方衆生が一人々々此方から持ち廻はつて向ふのては無い。如

來の方より引きつけ寄せて下されて、皆一様に如來の方角に向はしめて下さるのである。

さて斯く頂いて來れば我々の頂き處は外には無い。今迄前後左右色々思つて來たが是れ皆むだ事で有つた。今迄長々迷つて居たが、今の今迄思つて居た事は、皆な方角が間違つて居たのであつたと、茲に氣づかせて貰ふ一つである。信心を頂く迄は、自分の方に佛を引きつける事のように思つて居るから、いかぬのである。此方が佛を引きつけるのではない、此方が佛に翻るのである。今迄徒らに歎けたり悲しんだり色々して居たのであるが、要するにそらごとたはごとの人生である。そらごとたわごとの人生に色々言うて居たのが大なる間違であつた。其の様な間違ひの私を哀れみ給はる大慈大悲であつたかと喜ばせて貰ふより他は無いのである。三世十方の諸佛の仰せには、曲がれるものを眞つ直ぐにせよとの教はあれど、其の眞つ直ぐにする事の出來ぬ私、其者が可哀相であると思召し、其事をば初めより能く御承知下されてある佛は此の阿彌陀佛の一佛である。此の我々力無き者、其の仕て見やう無き者をば殊に哀れと思召し、其者をば見捨て下さぬお慈悲とは實に有難い。今迄彼は思つて居たのが大なる間違であつた。極重惡人とは實に我が事であつた。底下の凡愚とは實に我が身の上であつた。一寸も自分では先きへは進めぬ人間、自分では一日も生活の出來ぬ人間、私では一步も動けぬ人間であつたとあやまり果てた一念が、彌々其の慈悲に氣づかせて貰ふた時である。偕て彌々氣づかせて貰ふと易いも、此程易い事は無い。唯其の廣大のお慈悲をハイと頂

くばかりである。佛は此の一步も進めぬ奴が哀れだと言て、下さるのである。「罪の深いのは最もである。悲しいであらう、苦しいであらう、其處が自分の察しをつけ處だぞ」と、我々目かけて言つて、下さるのである。唯此の一つである。

此の一つに氣づかせて貰ふと人生の事は何でも無い。悲しい苦しいと言つて居るのは何とかいふに、自力一つで人生を突き通さうと思つて居るからである。「今迄自分の思つて居た處は實に大なる間違でありました。此程の大さかさま事を言うて居た私を、お見捨て無き大慈廣大のお慈悲であつたか」と、あやまり果てた時の心は何と言はうか。「無上淨信の曉に至りぬれば云云」とお示し下されたのが茲である。初めより矛盾撞着して居る人生に、我々如何に思つた處が行かう筈が無い。右へも左へも初めより動きのつかぬのが人生である。抑々我々人生に生れて意義有らしむるも有らしめぬも、此のお慈悲に氣がつくと氣がつかぬとにあるのである。去りながら人生を唯斯く思つた丈けては駄目である。機心の深信丈けてはいかぬのである。もとく佛が其の罪の深い者を哀れみ、別願中の別願をお起し下された。其の罪深き煩惱の衆生を救はんとお誓ひ下された其の廣大本願のお力を確つかり頂かねばならぬのである。

佛が斯く廣大の慈悲心をお起し下された所以のものは、佛かねて我々が哀れなる有様を知し召し下されたからである。「決して自分の惡しき心を善くすると思ふのでは無いぞ、そつういふ仕て見様無き者を哀みて、昔より佛が茲に待て居るぞよ」と言つて、下さるのである。「和讃」には宣はく

如來の作願をたづねれば、苦惱の有情をすてずして、回向を首としたまひて、大悲心をば成就せり。

斯く人生に苦しんで居る有様を御覽下され、其者を救はんとする御一念よりお建て下された第十八願である。又

十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる。

阿彌陀佛が特に阿彌陀と名乗りを上げて下されたは何である。か其の大慈廣大の親様故即ち阿彌陀とお示し下されたのである。此の廣大のお慈悲に氣がつく一念に「あゝ斯くの如き廣大の親様であつたか南無阿彌陀佛々々々」と、四方八面間違つて居る者の心に信心の夜が明けて下さる。向ふより一つ夜を明けて、助かる道は此の方角ぢやぞとお示し下さる時は、左右一度に其方角に向き直らずには居られぬのである。「斯くの如き廣大の親様であつたか」と、此方から向き直るのでは無い。阿彌陀如來と顯はれて、向ふ様より呼んで下さる、其の曉の方角へは向き直らずには居られぬのである。此の廣大の呼聲に氣がつけば、十方法界互に相争へる者、あせれる者、如何なる岐路に泣き叫んで居る者も、凡ての道が絶え果て、今迄此の廣大の佛をします事を知らざりし愚かさよと、佛に向かはずには居られぬのである。而して斯く一人々々が南無阿彌陀佛々々と親の方角に向はせて貰ふ時は、先程申した算を亂した如き人生、到底秩序の成り立つ筈の無つた人生、揮着は免れぬ等の人生、其の人生が其時よりちやんと立派にお慈悲の方角に頭を揃えて整頓せられてある。「和讃」に

萬行諸善の小路より、本願一實の大道に、

侵入しぬれば涅槃の、さとりはすなはちひらくなり。

有難いとお慈悲に向ふ一念に、人生有りとするもの皆な其時より前後左右一時に、お慈悲の方角に整頓せられてあるのであります。

三

甚だ言葉に角が立つが、此の如來で如何にも自分如き者を見捨て、下さらぬお慈悲であると氣づかせて貰ふ迄は、人生直ぐ此の儘で有難いと思へ、満足と思へと言はれたつて然うは思へぬのである。去りながら氣がついて見れば今迄長々逆境に悩んで居た私に、佛は常に此の親心を知らせんとて、其の境遇々に應じ、姿を顯はし心を廻らして、「之だから佛でなければ駄目なのだ」と其者を見捨てぬ慈悲であるぞと、常に御手引き下されてあつたのである。我々は昔から絶え間無く此の廣大の御手引きに遇つて居たのである。さて彌々此の慈悲に氣がついて見れば、

ひとたびもほとけを頼む心こそまことの法に叶ふ道なれ。今迄は誠の道が見え無つたのである、誠の法が分ら無かつたのである。斯ういふ風に實行すれば善いなど、此の人間の分際でそんな事言うた處で仕様が無い。一刻一寸もちつとは仕て居られぬ身の上である、然るに此者を哀れみ、此の者を見捨てぬとある仰せてある。此の仰せを聞いて見れば、唯ハイと頂く外は無い。如何にも仕て見様無き私なればこそ、此者を哀れみ思召し下されたのであるかと、何度でも無い唯一度である。唯一度氣づかせて貰うて見れば、「歎異抄」に

茲の所を、

一向専修のひとにをいては、廻心といふことたゞひとたびあるべし。その廻心とは、日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこころをひきかへて本願をたのみまいらするをこそ廻心とはまうしふらへ。云々。

廻心といふ事は唯一度である。其の一度とは「日ごろ本願他力眞宗を知らざる人」——實に他力も他力も此上の他力は無い。行くに行かれぬ我々を哀れと思召す其の御親心一つ故全くの他力である。其のお心は此方から頼んで来て下さるのでは無い。向ふより寄り添ひて来て下さるの故御廻向である。其のお心は即ち佛の御まことである。まことまこと一分も歪んで居無いたこと。否、歪んで居無いたことぢや無い、歪んで居る者を見捨てぬとあるまことである。彌陀の智慧をたまはりて——彌陀の智慧である。此方の智慧は間違つた智慧、間違つた考である。此者に向ふより彌陀の智慧を賜はる故に「日頃の心にては往生叶ふ可らず」と初めて氣がつくのである。斯く氣がついて「もとの心を引きかへて本願を頼み参らするをこそ廻心とは申し候へ。」——如何にも有難い親様のお心であると、此方が如來のみ心に叶はせて貰ふのである。之が本願の呼聲に氣のついた一念、所謂「彼の佛願に順ずるが故に」といふ處であります。如來の廣大な方向、如來の廣大な物差、其の廣大な物差が如何にも衆生が可哀相であると、曲つた者に曲つて向ふよりお心を屈けて居て下さるのである。此のお心

へるのである。之が眞實罪に氣のついたのである。斯くなれば自分の罪の深い事に氣がつけばつく程彌々お慈悲が有難い。度び／＼信心者が喜ばれるのを聞くに、罪深くは皆な自分の方に附くのである。斯く罪深き身を捨てさせ給はぬ如來のお慈悲と喜ぶ身になれば、法の力に自然に西へこそ行けてある。之こそ眞實本願の船に乗つたものである。『和讃』に

生死の苦海ほとりなし、ひさしく沈めるわれらをば、彌陀弘誓の船のみぞ、のせてかならずわたしける。

生死の苦海に沈んで居る我々を哀れと思召し、此者をばお救ひ下さる大悲大願の御船である。此の外に我々が助かる御船は無い。又『教行信證』の總序には、

難思の弘誓は難度海を度するの大船、無碍の光明は無明の暗を破する慧日なり。云々

此の無明の夜が明けるには、無碍の光明で無ければ仕様が無い。蠟燭やランプの火で喜んで居ては直ぐ消えて仕舞ふ。到底夜の明けるためしは無い。其の無明の人生が可哀相である、其のさ迷へる人間が哀はれてであると、現はれて下された彌陀大悲の佛日、盡十方無碍のお光である。此お光が普く照耀して下さる。其のお光を我々は頂くばかりである。之を頂いた處が「無上淨信の曉に至りぬれば」である。人生此のお慈悲を頂く以外に、夜の明けるためしは無い。

又次の歌には
のりを聞く道に心のさだまれば南無阿彌陀佛と稱へこそすれ。

此の廣大のお慈悲に氣がついた一念には、唯南無阿彌陀佛々々

を聞く時は如何にも私の方が大間違ひてありましたと、あやまり果てるより他は無い。茲になると結局自分の方角が間違つてあつたといふ一つである。

私が昨年夏旅びをした時、或所に泊つて僅かな物を失つた。之は確かに失つたのである。決して人を疑つてはならぬと思つても、瞬間の中に直ぐ人を疑ふ心が起つて来る。然うて無いと何程思ひ反しても、出て来る迄は直ぐあとから疑ひの心が止まぬのである。處が歸京したら後から書物の間から、こゝりと出て來た事が有ります。夫が彌々見えた時には之迄の思ひが悉く間違ひてあつた事が一邊に分つて来る。斯くなれば之を言ふなどいはれても言はずには居られぬのである。人生何う仕様と思つた處が仕て見様が無い。其の仕て見様の無い者を見捨てぬ親様のお心と氣のついた一念には、あゝ是程迄に此者を待つて居て下された廣大のお慈悲であつたか、あゝ有難いと、最早やあゝの斯うのと言ふ必要も無い。心も言葉も絶え果て、徹頭徹尾間違ひの此のからだ、一分一厘も取り揚げられぬ罪深き私を、夫程迄に見捨てぬ親様が附き纏うて居て下されたのかと、唯廻心懺悔の思ひがあるばかりある。蓮如上人の又のお歌には、

罪深く如來をたのみ身になれば法の力に西へこそ行け。此時こそ眞實罪深くである。自分ていくら罪が深いと思ふて居ても、何うかして善くならうと思つて居る内は、まだ本當に罪が深いと分つたのでは無い。此の様な自分を哀れみ給はる廣大の佛であつたかと、お慈悲に氣のつく初一念に、初めて無量劫來仕様の無い罪惡深重の身であつたと、眞から分らせて貰

々々と喜ばせて貰うばかりである。外には何も無い。親鸞聖人が南無阿彌陀佛と御恩報謝の稱名するばかりぢや々と示し下されたのが茲である。此の廣大なお光を頂く上からは唯南無阿彌陀佛々々と喜ばせて貰ふ他は無いのである。我々の間違つた方角、間違つた方向、夫が悉く正しき方角に直るかといふに、夫は直らぬ。去りながら其様な間違つたからだ、煩惱持つ身なればこそ、此の苦しめる身を救はんとする南無阿彌陀佛の廣大のお慈悲であるかと、其方を仰ぎ其方を喜ぶ一つて、人生悉く喜ばせて貰ふ事が出来るのである。此の廣大の御恩を喜ばせて貰ふと、誠に誠も之程のまことは無い。親鸞聖人一代の御教化は「念佛成佛是眞宗」といふ一語に極まるのである。此の廣大な如來のお心を頂いて、南無阿彌陀佛と念佛を稱へて淨土に生れさせて貰ふ。其の廣大な南無阿彌陀佛のお慈悲によつて、親様の處に行かせて貰ふ。之が「念佛成佛是眞宗」である。淨土眞宗の教えは此の外に無い。もつと之を叮嚀に言ふ時は『歎異鈔』の中に、

他力眞實のむねをあかせるもろ／＼の聖教は、本願を信じ念佛をまうせば佛になる。

とある。即ち如來他力の眞實の旨を明かせる聖教は「本願を信じ念佛を申せば佛になる」といふ此の以外には無い。此の本願を信じ念佛を申すといふ所を能く頂かねばならぬ。唯徒らに行に稱へる念佛では無いのである。先程より言ふ如く此の間違ひの私を救はんとある如來大悲の御本願、別願中の別願が有難いと頂いて、大間違ひの私が如何にも間違ひであつたと氣づかせて貰ひ、南無阿彌陀佛々々と喜ばせて貰ふ

のである、其の本願が即ち眞實の教である。其本願の有りの儘が念佛である、行である。夫を頂いたが信である。夫で彌々淨土に参らせて貰ふが眞實の證である。一部の『教行信證』といふも要する所「本願を信じ念佛を申せば佛になる」といふ一語の外には無い。此の一語の中に本願の尊い事、念佛の尊い事が能く頂かれるのであります。而して如何なる譯か知らねども此の慈悲一つで引き入れて下さる證の境が有難い。而して之を一語に引きくるめて頂くと、即ち如來の御まこと心の一つである。根本の御まこと心から皆な現はれて下されたものである。此の私の上に振り懸り、振り注ぎ給ふ御廻向の御まこと心、極まる所、此の一つである。之より外に眞宗の眞の字の意味は無いのであります。

偕て斯く頂くと、

心だにまことの道にかなひなば祈らずとも神やまもらん此の本願のまこと一つが分れば、諸神諸菩薩に一々お禮するても無い。山川草木國土天地、そんなものを目當にするても無い。又日常生活に頼みを置けても無い。眞實まことの一道さへ頂かせて貰へば、我々日常周囲の事は無論の事、山河草木天地に到る迄が、皆慈悲の一筋道にちやんと整頓せられてあるのである。今迄無秩序と思つたのは、實は自分の心からであつたのである。『現世利益和讃』には、

南無阿彌陀佛をととなふれば、この世の利益きはもなし、

流轉輪廻のつみきへて、定業中天のぞこりぬ。

南無阿彌陀佛をととなふれば、梵天帝釋歸敬す、

諸天善神ことごとく、よるひるつねに護るなり。

善くして置いて下されてあつたのである。如來廻向の御手廻はして、此の慈悲一つに目が醒めて見れば、不思議なる哉山川草木國土天地、皆其の光りの中にちやんと整頓せる人生であつたのである。此の方が善いけれど、此の方で止めて置かねばならぬなど、實に入らぬ遠慮をして居たものである。人生はちつとも撞着して居無い。自分の思ひが通らぬなど、今迄は何を言うて居たのであるか、言ふては自分が間違つて居るもの故、そんな事思つて居たのである。

四

斯く言ふと甚だ秩序を立て過ぎるやうであります、多年の間信仰問題の傾向を見て見ると、三四年前迄は自分の心に冥想して喜ぶ冥想風に向いて居た。冥想風に如來の慈悲を觀じて有難く思つたり、冥想風に佛の光りに接せんと試みてみたり、色々さういふ風に傾いて居た。處が人生の問題が段々切迫して來ると共に、然ういふ風では行けなくなつた。此方は徹頭徹尾此方で無ければいかぬとなつて來た。之は御慈悲に氣のついた時は誰でも余りに嬉しいので喜ぶが、併し肝心の慈悲一つで喜ぶので無いと、其の喜びは又消えて仕舞ふのである。自分は今喜ぶべしとなるのである。之が慈悲一つで喜んだのならば例ひ其喜びは消えて仕舞ふても、南無阿彌陀佛々々と唯夫ればかりが心中に疑ふに疑へ無くなるのである。處が此の數年間に、さういふ風に冥想風に喜んで居たのが皆な行けなくなり、此の度は其反動で一般に實行風になつて來た。何んでも人生の事は實行でなければならぬ、

日常一刻々々の日暮から、衣食住の未に至る迄、佛の方よりちやんと善いやうに仕て置いて下されて有つたのである。自分の身の上の不幸、慈悲に氣がつく迄の凡ての境遇、道行き、一として慈悲のお手廻はしならざるは無つたのである。『御本書』總序の御文には、

然れば淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり。斯れ乃ち權化の仁齋して苦惱の群萌を救済し、世雄の悲正しく逆誘闍提を惠さんと欲して也。

縁が熟して、充分熟し切つた處で悟らしめんといふ慈悲である。韋提希夫人が苦しんで、苦んだ揚句、此の苦める者を見捨て給はぬ慈悲と氣づかたれ處が、安養を選ばしめ給へりとある所である。釋尊の出世も提婆の逆害も此の爲に外ならぬ。人生一度茲に氣づかせて貰ふと、今迄無意味無秩序と思つて居つたもの、何一つ意味の無いものは無い。位置の高下、力の強弱、貧富幸不幸、皆な是れ人生の間違ひぢや無く、此の慈悲に氣づかしめん爲の御方便であつたのである。茲になると十方世界念佛の衆生は、皆な共に手を取り合ふて佛に向ふものと決まつて居るのである。矛盾撞着、生死の苦海などいふはまだ慈悲に氣がつかぬ前の事である。此の本願一實の大道に氣がつけば、如何なる境遇、如何なる生活、乃至一抔の飯、一椀の水に至る迄、皆與ふべきに與へ、下さるべきに下されてあるのである。皆慈悲のあなたの方でちやんと都合よく御心配下されてあつたのである。如來の廣大な育てに、何の見のこし、何の手落ちが有らう。皆な

あゝしてやつて行かう、斯うして進んで行かうと、學問にあれば實業にあれば、皆な實行的方面に突進して來たのである。斯ういふ考えが必ず突き當るのは分り切つて居るのである。人の性には定散の二通りがある。定とは慮りを止め心を凝らして進まうといふ即ち冥想風である。散とは惡を癢し善を行つて行かうといふ實行風である。つまり近頃のは定の代はりに散になつたのである。冥想の夢醒めて實行になつて來たのである。去りながら其の實行が又第二の夢である。人間がいくら善く思はうたつて思へる者ぢや無い。いくら斯く仕やうたつて出來る者ぢや無い。極重惡の一步も動けぬ者と、昔から大小の聖人が皆言つて置いて下さるのである。唯斯くの如き者を見捨て給はぬ廣大の親様、此の親様が居て下さる事、是れ一つが人間の明るみである。

極惡深重の衆生には、他の方便さらになし、

ひとへに彌陀を稱してぞ、淨土に生るとのべたまふ。

斯く頂けば之れ迄こしらへて居た様ないかさの信仰ではいかぬ。自分の心を當てに仕たり、自分の實行を當てにしたりする様な、そんな弱々しい信仰では無いのである。極惡深重の衆生は心は貪欲瞋恚無明に蔽はれ、人間同士はお互に修羅地獄の苦しみである。然るに此者を哀れと思召し、其者を見捨て給はぬ慈悲である。其の御心が有難いと頂くこの一つである。斯く氣づかせて貰ふ一念には人生悉く南無阿彌陀佛である。今迄撞着矛盾苦しいと思つて居たのは、皆な間違つて思つて居たのである。古歌に曰く、

うれしさを昔は袖についみけり今宵は身にもあまりぬるか

な。

蓮如上人は此の歌をお解きなされて『御文』に、

うれしさをむかしはそでにつゝむといへるころは、むかしは難行正行の分別もなく、念佛だにも申せば往生するとはかりおもひつるころなり。……

お慈悲の廣大な事は頂かずして、唯念佛を稱へれば善いと思つて居るのは、嬉しさを猶ほ袖に包んで居るものである。佛を有難いと思へば善い、何事も如来の御恩ぢやと思へば善いといふのは、一應はよい様であるが、皆な是れ袖に包まれて居る人である。

……こゝは身にもあまるといへるは、正雜の分別をきゝわけ一向一心になりて信心決定のうへに佛恩報盡のために念佛まうすころはおほきに各別なり。かるがゆへに身のおきどころもなくおどろあがるほどにもふあひだ、よろこびは身にもうれしさがあまらぬといへるころなり。今迄は苦しいけれども南無阿彌陀佛である、御恩であると言ふて居たのである。然うては無い。如何にも罪深く仕て見様の無私である。之だからこそと氣づかせて頂いたのであるから、正雜の分別を聞き分け一向一心になつたものである。唯恵みばかりである、世間の何てもゆかぬ私である。此者を見捨て給はぬ如来のお慈悲ぢや」と頂く一筋であるから一向である。斯く頂いた一念には、歡喜讚歎極まりて、唯南無阿彌陀佛と申上るより外に仕様は無い。即ち「信心決定の上に佛恩報盡の爲に念佛申す心は大に各別なり」である。もう斯くなれば人生の解決を得たのである。曠劫多生以來長々附き

を得度いと言つて來られた。私は其人の心が解つた故遠慮なくお話致したのである。貴方が他の所を得度いと思ふのが間違つて居るのである、今の所に居られぬと思ふ其の心が間違つて居るのである。其間違ひの者を見捨て給はぬ如来の方を仰がにやいかぬ」と段々話したのであります。すると其の第一席の話の中に忽ちいづかれて、「之迄自分の思つて居たのは實に間違つた信仰で有つた。自分に信心があると思つて居た爲に、却つて人を惡しく思ひ苦しんだのである。今日初めて今迄の間違ひを知らせて頂き、實に安心致しました」と非常に喜ばれた。私が「夫では人を不足に思ふ心は止みましたか」と尋ねたら、「止むの止まぬのといふ段ぢや無い。今迄自分に信仰が有ると思ひ、教育が有ると思つて居た爲め、却つて人を不足に思つて居たのである。そんな事思つて居たのが第一の間違ひで有る。實に慚愧に堪へぬ」と言つて非常に喜んで歸られた。實に危い處迄迫らんとした人もお慈悲に氣がついた爲に救はれたのである。お慈悲に氣がつくと、一刻も待つて居れぬと考えたのが間違つて居たのである。實に茲の所は無明の闇に迷ふか、光明の海に出るか、何れかの迫つた問題であります。

彌々御縁が熟して氣づかせて貰ふと、此の信仰は信仰界の信仰でも無ければ、日常生活の爲めの信仰でも無い、實に曠劫多生の夕べより盡未來際の際に至る迄の大問題の解決をさせて貰ふたものである。我々の目に映つる人生、學者や文學者の言つて居る人生は實に小さな人生であるけれども、佛より見給ふ人生は、上は大乘小乗の菩薩より、下は蠢々蠕動の

纏うた大問題が、もう何一ツ心配が無くなつて、南無阿彌陀佛々々と、彌々茲に決着がついたのである。所謂生死の一大事因縁を極めたのである。如来が世に出興ましな一大事因縁も此の外に無い。此の時の喜びは何にも彼にも言ひ様が無い。かるが故に身の置き所もなく、踊り上る程に思ふ間、喜びは身にも嬉しさが餘りぬるといへる意なり」とある。

さて斯く無上淨信の曉に達せさせて貰ふて見ると、長々の三有生死の雲晴れて、清淨無碍光耀朗かに、一如法界眞身顯はるである。言ふに言はれぬ清淨無碍のお光が照り渡り、一如法界の廣大なお姿が有り／＼と顯はれて下さるのである。去りながらお姿が顯はれて下さると言へばとて、肉の眼に拜めるのでは無い。如来にも廣大なお慈悲がまします、歸命盡十方南無不可思議と仰ぎ上げ／＼日暮させて貰ふ斗りである。

以上は今月中に於て、人生の種々の事柄に苦しんで信仰を求めにお出下された人達に就いて、自分の感じた所を申ししたのであります。近頃は、自分は今迄人の爲に盡したが其爲め却つて窮迫に陥つて光が見えぬと泣いて居る人、或は自分は今迄善くして來たが、世間が思ふ様に仕て呉れぬと泣いて居る人、そういう風に苦しんで居る人が多いのである。こういう人は、自分が今迄善くして來たといふ考が去らず、こういう不完全な者を見捨て給はぬお慈悲があると氣がつかぬ爲め、物質上に於ても満足が出来ず、何を與へられても一つも意義をなさぬのである。此のお慈悲の分らぬ間は、何を與へられても満足が出来ないものであります。現に昨夜の如きも或る一人逆境に居る人が自分の苦しさを訴へて新しい居場所

類ひに至る迄、佛より知らしめ給ふ大慈大悲の光りの中にある人生である。一度目醒めて此のお慈悲を頂く一念には、無量壽の生命迄も賜はるのである。『和讃』に、

如来清淨本願の、無生の生なりければ、本則三々の品なれど、一二もかはることぞなき。

無生の生の極樂へ往生させて貰ふのである。實に無生の生の極樂である。斯く頂く時は「三有生死の雲晴れて、清淨無碍光耀朗かに、一如法界眞身顯はる」——長々三有生死の暗晴れて、眞に無量壽佛無量光佛無碍光佛のお光を拜ませて貰ふ。實に是程有難い事は無い。斯くありてこそ、如何なる境遇如何なる場所も、大慈大悲の溢れぬ處は無い。此上は斯くあり度いと求むる生活ではなくて、お慈悲に充分腹ふくらし満足の生活である。聖人が一代お喜びなされた天親菩薩『淨土論』の御文に宣はく、

佛の本願力を觀するに、遇ふて空しく過る者無し。能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

と。又『行卷』には宣はく、稱名は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたまふ。

と。又『信卷』には宣はく、極惡深重の衆生大慶喜心得て諸の聖尊の重慶を蒙るなりと。此上は南無阿彌陀佛々々と御恩報謝の日暮である。人生是程の幸福は無いのであります。(十二月十九日)

聖傳

ヂーヤタカ釋尊傳

はしがき

ジャータカ(本生譚)は釋尊種々善巧方便のみあとにし
て比喩、傳説、物語等よりなり、其數五百五十あり。
第一卷はおぼつかなくも通りつゝ幸に譯し終りぬ。又
他日次をものする光榮をうくべし。曩に本生譚の始に
かゝげし釋尊小傳はこれに冠せる過去世の部分をはぶ
きたれば、茲にそを譯し始めぬ。實に世々生々の宿縁不
思議と謂つべし。袖ふりあふも他生の縁とかや、現世
さまぐの事大小其根ざし何れの世にかありけむ。此
世かざり曠劫以來迷ひ來りし生死を離るゝこそ、かゝ
る方便引入の御めぐみなれ。此歡喜もて遙の古を、譚を
通して、おもひやりつゝ、轉々やるせなき大御心に感泣
し奉るのみ。

第壹 久遠劫の昔

算數の及ばざる遠き古、アマールヴァアツチなる都ありけり。

十三、馬は嘶き、象は吠ゆ、大鼓や喇叭音をます、
輻車の軋たゆるなく、食舗飲店人を呼ぶ。

なほ進みて、

十四、所要のものは整ひて、製業なべて盛なり、
七の寶備はりて、多くの種族むらがれり。

十五、法の人等の住む土地は、天使の都とあやまるゝ、
此處に一人の波羅門は、其名スメダと呼びけるが
財は饒かに億を超ゆ。

十六、學識深く、智慧勝れ、三吠陀等も暗んじて
神話、傳説、儀式等、皆悉く通達す。

一日聰明なるスメダは己が華美なる上房に退ぎ惆悵跌
して思に沈みぬ。あはれ尊者よ、他生に流轉せん身こそ苦し
け、輪廻の生に穢身を受くるぞ堪へがたき。此身本來生老病
死の器なり、さはれ、よし、かゝる身なりとも生死の流を越
え果てゝ大なる不死の涅槃に達せざらんや。涅槃は寂靜にし
て生死を斷ち、老衰病苦、悲喜を離れたり。いかで涅槃と生
死、脫離の道なからんやと。

十七、たれこめて我思へらく、轉生、無常悲しけれ。

十八、生老病死身に纏ふ。

十九、されば此等に離れたる、涅槃をこそは求むべき、
敗壞の此身逃れしめ、悶の毒器棄てしめよ、
欲願も亦脱れてん。

二十、能はずとも道あらん、我其道を尋ねべし、
さらば苦惱を離るべき。

愈々深くことばを究めぬ。曰く今世苦惱に對して快樂あ

此處に一人の波羅門ありきスメダと呼ぶ。父母ともに家柄勝
れしが上に、先祖以來七世清淨にして穢雜の生なく、人には
悉く讃め稱へられ未だ譏りを受けざりき。

スメダは優雅にして風采氣高く、比なき美貌を供へし柔和
の若者なり、彼は他の諸術をば修めずして専ら波羅門の學術
を研鑽せり。両親はスメダなほ若き時逝きぬ。管理者なりし
家臣は一日財寶の目録をもちて、金銀眞珠寶石をはじめ諸の
珍寶の藏庫を開きぬ。彼スメダに向ひて曰へる様「見給へ是は
どは君が父母に屬せしもの、是程は君の祖父母に、是程は君の
曾祖父母によりて蓄積されし寶なり、此等は總て君に譲られ
しもの、よく七世相傳の寶を守護せられよ」と

賢きスメダ思へらく、我親、祖父母、曾祖父母等は此等の
無限の寶を有せしと雖も、他界せし時其一分だに是に伴ふ事
なかりき。しかず我死後に於て此富を身に帶せばやと。王に
己が心を告げ奉り、スメダは都に布達したり。即ち鼓を打ちて
人々を集め、大施物を爲し、己は發心して沙門とぞなりける。
此次第を詳説せんに次の如し。譚はブダバサ經に載せられ
ぬ。折々筆を加へて説明せんとす。

四アサンキヤス(アサンキヤス算數及ばざる長き年間
の事)十萬シクルの古、喧鬧激しく賑々しきアマールバ
ナ或はアマールと呼ぶ都ありき。

十二、算へつくせぬ太古、アマールと呼ぶ都あり。

壯麗、快美類なし、十の市の音かしましく、
飲食茲に饒なり。

次に十の市の音を擧げて、

るが如く、來世にもこれに等しき關係あるべし。恰も熱あれば
寒ある如く、苦の娑婆に對して、貪欲煩惱の火を消滅すべき
涅槃の境あらん。又惡逆の行爲に對して、善なる清淨のもの
あるべきが如く、惡世に反して生死流轉を止むべき無生と云
ふ涅槃の生あるべし。

二十一、惱と幸とある如く、來世にも亦二つあり、

我は無生を願はしき。

二十二、熱あり、必らず寒あり、煩惱熾盛の大火には、

消滅の世こそ求むべき

二十三、惡に對する善のごと、生にさまぐ、變りあり、

涅槃を我は頼もしき。

恰かも穢物の中に落ちし人はるかに五色の蓮華麗はしき池を
認め、これを求めて行かばやと何れの道を通るべきやを思案
しつ、遂に探し得られずば、罪は己にありて池に非らざるな
り。其如く此處に涅槃の大湖ありて、罪垢を洗ふと雖も、人求
めて達せざらんには、其人の咎にして湖の咎には非ず。或は
盜賊に圍まれし人逃ぐべき活路開かれたるに、逃れんとせざ
らんには、是彼人の咎にして道の非にはあらず。又病者あり、
是を癒すべき醫あるを頼まずして病重らば、是醫の咎にあら
ざるが如し。此如く人、罪惡の病に犯されつゝ近き案内者あ
るを悟らて罪を出離すべき道を知らざらば、咎人にありて道
に非ず。

されば次に曰く、

二十四、或人穢れに陥りぬ、漲ぎる池を認めつゝ、

道を求めて得ざりせば、池の咎にはあらざらん。

- 二十五、かく罪惡を清むなる、涅槃の湖ありながら、求めて道に達せずば、是湖の失ならず。
- 二十六、人怨敵に圍まれつ、一縷の活路開きしに、逃れざりせば人の咎、路は責むべきいはれなし。
- 二十七、めぐみの道は開けたり、罪に汚れし我人が、道を咎にはあらぬなり。
- 二十八、病の床に惱む人、瘡さん醫師を頼まずば、醫師の咎にはあらざる。
- 二十九、かく人々が罪惡の、病に迫り法の師の、力によらて沈みなば、是師の咎にあらぬなり。
- 彼なほも熱心に説きぬ。人衣の美を欲して肩にくられし屍を放棄し、歎び勇みて去る如く、我亦此消滅を棄て、欲を斷ちて涅槃の市に入らん。又糞尿を汲める人が衣の裾や裾等に汚穢を著くと雖も汚穢は直ちに棄て、清むべし、是に毫も愛著せず、如此我機身をためらはず打棄て涅槃の都に入らず。又海士が役立たぬ舟を惜しまず打捨つる如く、此九つの臭穴より不淨を漏す此身を厭ひ、涅槃を愛樂せん。或は寶石を運べる人道に盜賊と共ならん時貴品を失はん事を懼れ、忽ち路を轉じて安きに行くが如し、我不淨の身は恰も賊の如し、若し是に執著せば聖なる崇高の道、貴き心の寶は失はまし、故に此如身を捨て、涅槃に入らんとす。
- 三十、肩に屍をくられつ、來りし人が忽ちに、これを厭ひて投げすてん、氣も清々と行く態や、三十一、我も離れん潔よく、あまたの穢れ滿てる身を、無明の闇に迷ふ身を、

- 三十二、糞を汲みとる男女たち、汚物に欲はあらざる、我亦汚穢の充てる身よ、汚水の如く捨てやらん。
- 三十三、虫くひ壞れ朽ちはて、海にかなはぬ捨小舟、海士は惜しまず見捨てまし。
- 三十四、かくて我亦九つの、臭液漏る、此身をば、破れ小舟と捨てんかな。
- 三十五、貨物を運ぶ人も亦、道づれたりし賊と斷ち、道をかはして忽ちに、やすきところを進むらん。
- 三十六、此身は大なる賊ぞかし、善失なは悔めべきに、疾く我身をば捨てよかし。



告白

遠慶宿縁

此告白をなされた方は、香樹院師の御育てを受け、特に其御末期まで御教化を受けられた同行了信禪門の孫に當る方である。御本人の望に任せ無名で出していた。且つ續いて掲げたる聞書の一節は、了信禪門が特に子孫の爲めに書きおかれたものである。昨年私が其御宅へ参りたときに、近頃簞底より出てたりと示されたが、拜見してみれば、實に安心の極粹を鍾めたるものである。そこで告白と共に其要所を抜出して、皆様と共に聴聞させて頂ふことにしました。

去る二十九日、森川町の求道舎に近角先生を御訪致しましたら告白せよとの仰て御座りました。私は細々御慈悲を喜ばさして貰ふて居りますけれども、固より不文、且つ此月は少し心忙はしき事もあればと御断を申しましたけれども、是非書けとのお言葉で爰に告白させて頂きます。

さて愈筆を採りて見ますと、萬感胸に充つるとても申しましょふか、何とも書く事が出来ません。嗚呼何たる仕合で御座りますやと、先だつものは涙であります。煩惱の塊

りの此身、親にも子にも明かされぬ此の心、情なき日々の日暮し、其下から南無阿彌陀佛々と稱へさせて貰ひます。嗚呼何たる御慈悲様では御座りますやと只々感謝の涙より外はありません。

私は江州であります。吾地方は御法の熾んな地でありまして、又私の家は祖父了信師は申に不及、先年死くなられし父上、現在の母と共に御法を喜ばれました。然るに私は壯年の頃社會の潮流に連れて政治界にも首を出しました。演壇にも立ちました。否な地方で理屈言ひといはれました。夫等の境遇より自然御法に遠ざかりまして、父母の日々喜ばせて貰はれるを看聞もして、時々或はからから事もありました。其後は御縁が御座りまして先生の御法話を聴聞させて頂きました以來、之れは是非未來の安堵といふ事をせねばならぬと氣が付きました。しかし此時分の私の思ひを隠さず申しますれば、頼む斗りて御助け、南無阿彌陀佛斗りじやとは吾々愚夫愚婦に對せらるゝ話にて、外に玄妙なる原理のあるものなるべし、是非之れを闡明せなければならんと考へました。多少の雑誌を看、又始終研究的の考を持ちました。此時分の事であります。嗣講福田義本師に御講話を佛教内の道理では合點し兼ねるから、佛教以外の理屈で説明してくだされと御頼み申した事があります。定めて同師も御あされられたる事と今考へれば思はれます。以來絶へず求道も見せて貰ひ、又度々先生の講話も聴聞させて頂きました。然るに或る時或る雑誌にて、此等の問題は到底人間の闡明し得る事ではないといふ事を自覺させて頂きました。則ち御開山聖人を始め皆

々の高僧方が妻子も財産も御捨なされて一身を打込むて御懸りなされても御分りにならん問題を、吾々ふぜいが生計の傍研究などとは片腹痛い事じや、宗教は信仰によりて死活するものじやと迄は知らせて頂きましたが、まだ一向喜びの心が出ません。報謝の思ひも起りません。所謂隔靴搔痒とても申しませうか、安心處ではありません。然るに一昨四十一年の秋、秋山地方へ旅行しました。其時は御假名聖教の三を携帯して、夜々拜讀して居りました。其執持鈔を特に難有拜讀して居りました處へ、家から求道を送られました。其求道には

釋迦彌陀は慈悲の父母、

種々に善巧方便し、

吾等が無上の信心を、

發起せしめ玉ひけり。

此の御和讃にて御講話がありました。此の二冊を拜讀して居りましたが、嗚呼今思ふてもぞく／＼致します。如何なる御慈悲乎一念に氣付せて頂きました。嗚呼夫れ程までに此の私しを思召して久遠劫來追懸け廻はして、飽きも退屈もなさらず種々御方便くだされたとは、何たる高大な御慈悲様で御座りますやら、永々御苦勞懸けました事の勿體なやと、嬉しいやら懐かしいやら、其の時の思ひはとても言葉にも筆にも盡されません。唯々今迄氣付かず居りましたことの勿體ないのと、親様の膝下に拜伏しまするとき、あなたの懷に抱き上げられた様な心持がしました。二三日の後吾家の母に送りました手紙があります。其の時の心持が幾分浮ばれてあります。一寸と

御蔭様にて未來の大事に安心させて頂きました。是れといふも永／＼のあなた様の御骨折と、いやもふ腹一抔感

謝て御座ります。今こそは他力といふ事がいよ／＼明かに知られました。まふ／＼此の私一人の爲めに永／＼の御苦勞、何とも／＼御禮の申様もあります。さて／＼

何といふ仕合者で御座りますやら。參る御淨土には親父も御じい様も、又御開山聖人様も法然聖人様も皆々御出になるので最早死ぬ事がさみしくなりました。是れといふも日々夜々にあなたの御方便で／＼まで仕上げ被下た事の有がたやと、涙ながら稱名させて頂て居ります。あなたもどふか御内佛のおとつさんや御じい様に、よろしく禮をいふてくだされ。攝取不捨の御利益にあづかりたる心持は、又々かく／＼つにて筆にも言葉にも出ません。たゞ／＼永々御苦勞かけましたる事の勿體なやと思ふより外はありません。嬉しいや／＼、今どちらが死んでも出會處は御淨土、皆々一處に御目にかゝります。あまり嬉しさに歸るまで待てませんゆゑ一筆申送り申候。

十月一日

酒田にて

御母上様へ

あまりとうときまゝ、法然様の御教化を一口書きます。

源空があらん處へ行かんと思はるべし

何といふ御手強き御教化で御座りますやら、あふのこふのと後生にかけては虫けら同様の心でせんさくだてした事の勿體なや。あやまりはて／＼は南無阿彌陀佛／＼。私も御前も此上なき仕合者でありました。是れといふも皆あなたの御方便、御他力様じや、難有や、南無阿彌陀佛／＼。

先にも申た通り私は理屈言ひて、小股取りで、箸にも棒にも懸らぬ人並はづれた難物を、如何に御手強き御慈悲様で御座りまするか、此の極難信の御法を喜ばせて貰ふ身にして頂きたる事の何たる仕合者で御座りますかと、腹一杯感謝て御座ります。私は祖父了信師の創業せられたる商業にて、年半分は旅に居ります。宅に居りますれば世事にからまれて碌に御法も喜ばれませんが、旅行中は道歩くにも夜床に居るにも餘事なく喜ばせて貰ふ事、皆々了信師の御蔭と喜びます。夫れ而已ならず、御聖教やら御聞書やらを御殘し置被下候事皆々了信師の御蔭で、やがて親様の御方便と頂かせて貰ひます。無始以來の迷子が久遠劫來の初事に眞實の親様にめぐり會はせて頂きましたもの、喜ばずに居られましょふか、頼まずに居られましょふか、嗚呼嬉しや／＼、切ても切れぬ親子の中で御座ります。世渡りに追まはされ、忘れ勝ちの心の中に、事に觸れて思ひ出させて頂く事、嗚呼南無阿彌陀佛／＼。

佛教以外の理屈で無ければ合點の行かぬと申募りたる此の私しが、今は「彌陀ヲ頼メハ佛ニナル、其支證ハ南無阿彌陀佛ヨ」といふ御教化に腹ふくらせて頂く事の出来るのは御他力様の御成し業。「往生ホドノ」大事、凡夫ノハカロフヘキコトニアラズ」此の煩惱の塊りが研究の詮索のと何共申様も御座りません。「誓願ヲハナレタル名號モ候ハズ、名號ヲハナレタル誓願モ候ハズ候、カク申候モハカラヒニテ候ナリ。」嗚呼何たる仰て御座りますやら、唯々南無阿彌陀佛／＼と稱へさせて貰ふ計りで御座ります。近角先生の仰に従ひ、祖父了信

師の御聞書を拔萃致します。南無阿彌陀佛々々々々。

聞書

了信

お西の妙信寺様へ参り候處、心中をいへ／＼と仰被下候故申上る。私は是迄とや角思ふ心はなう成つて只今にては間違はさぬの御實一つを目當てに日暮させて貰ひ升と申上候。

仰に、夫は悪い。間違ひの有る無しと云は吟味の言ばじや。八十通の御文章に只の一ヶ所も無い。御文に無い事を云は惡ひと被仰、多くの人は是迄聞込た事を信じて居る、爰が誠に大事の所じやと仰られ、聽聞と云は今日計り／＼と聞くのじや、餘事外の事を信ずるのではない、只御助下さるゝ事を信ずるのじや、勅命の聞付られた相はいと振向計りじや、振向た心は後世助給へとみだをたのんだのじや、極樂へ参りたやと願ふ身に成りたのじや。たとへば落話の落た如じや。落口の分らぬ者はおかしくない。此落口の分ると分らぬは過古の宿善に限ると被下仰候。

又有時私は極樂へ参れる共参れぬ共心配もなく、又御淨土をさのみ樂む思ひもなし。たゞ此淺間敷胸の中からたへず稱名の唱へられて下さるが本間に嬉しい計て御座ります、何卒御直しに預りたいと申上候。

仰にみだを頼むと云はそう云ふ事ではない。他の身に成るのじゃ。樂みに成るのじゃ。たとへて云は善光寺へ参りたけれども路金が無い、一兩あれば参れると云時、人有て一兩呉れると夫を貰ふて嬉がつて居るやうな物じゃ。法は他力なれ共きが自力じゃ。又一人己も参たけれ共年は寄る路金は無しと云時、人有て其方は老人の事故金は持たせぬ、ごまのはいに取られる、己が連て参いつてやらふ、己にまかせと云人の言葉を信じ、左様ならば御連れ被成て被下せと、身も心も打もたれたがみだをたのんだのじゃ。もうしらぬ旅路へ踏出してから一文も錢はなし、行先は知らず、其人見失ふたら一足も行れぬが如く、あみだ様に心のはなれられぬが樂み、夫を連如様が寝ても覺ても憶念の信常にして忘れざるを、本願たのむ決定の心じやと仰らる。こちらには支度はいらぬ、連られて参る淨土なれば何の造作もない。唯あなたが戀しくなつかしく扶力に成りて忘れられぬが仰に隨はれたのじゃ。

我物と頂戴仕り本眞に嬉く御座有升。

妙又仰にたとへて云へば流るゝ水の中へ材木を打込むと水に連られて行が如し。水の中へ打込んだ時は娑婆の終り、迷ひの根切れ、命の有らん限は命に連れられてどこまでも行く。是を平生業成の宗旨においては今一定と仰られるのじゃ。

と被仰、誠に有難御座有升。命の終つた所が御淨土じやとは本眞に樂しまれます。

又仰に我機方はさつぱり忘れてしまふて、あなたの五劫永劫の御念力が我心に成て見たれば心底から樂しまれる斗り、之を深く頼むと云ふ。

私が思ふに水の中へ打込んだ時は歸命の一念、南とも無とも口へ出ぬ先に往生は定る也。最早攝取の光明の中なればもふ逃とうても逃られぬ、水の力にてどこまでも連て行て下さるゝ。是を正定じゆ不退轉の位と申なり。もう後へは戻られぬ。流れるに材木の力働きはみぢんもいらぬ。爰をよく聞くと仰じゃ。

併是はかりのたとへなれば定木にせず、傍に置き攝取不捨の御理り、平生業定の御法りをなぞらへて味ふべし。

是が善知識の言葉の下に歸命したのじやと。

お示し被下、誠に無量劫の初事を戴き、今こそ本眞に嬉敷成りました。唯御連被下る御方の御恩斗りじやと頂戴仕り、やれ／＼嬉しや／＼南無阿彌陀佛。

又仰に阿彌陀様の御心と私が心と一つに成たのじや。夫が佛心凡心一體じや。川の水が海へ流入ると一つに成如く、もう別られぬ。又他身と云は、あなたの御心が私か物に成たのじや。何に付てもあなたに心のはなれられぬじや。夫が深くたのんだじや、歸命したのじやこの御咄。

西尼講にて申上る。

段々御心切成る御爲聞に預り、何共有難存升と申上候。妙仰に聞へたてもうよいと云ような事ではないぞ、己が方は皆忘れて仕舞ふてあなたの御心が我心に成りて見たれば忘れられまい。たつた今手を組んで眞逆様に落る此私を、聞得る一つて助てくれる事が本眞に御受けが出来たらどふ忘れらるやうぞ。爰一つをよく／＼さく／＼のじや。善知識の御意のまゝが我了解に成のじやと。

御心切に御示し被下候へども、悲敷事には聞て居内斗り、皆忘れました。何は忘れてもあなたの思召一つは

私は唱禮念は佛智廻同と頂戴致し、夫を嬉しがつて居ましたに、夫では今少し殘多いとの御異見、恐入魂が飛ました。如何にも下さるゝ物柄を嬉しがつて居て其下さるゝ御手元の御苦勞のほどを知らずに居た故、御助け被下るゝ事が嬉しなかつたのじや。今は五劫永劫の御念力を私故と戴きましたれば御助け被下るゝ事は手に握つた心持、あら有難や／＼と喜ぶ身にめしなして被下、仕合者よろこび歟。

妙信寺様にて、

先達て御示を蒙り候あたへの味を日夜思ひうかめて味ひまするに、餘り／＼尊き御事と喜びますに、もしや味ひやうが違ひは致さぬか、今一應御尋申上度存じます。流水の中へ材木でも流すたとへ、水の中へはまる時、最早攝取の光明の中なれば逃とうても逃られぬ。爰が即得往生とも正定じゆうとも、平生業定不退轉とも載けば誠に嬉しく、命の有らん限は水(命)に連れられてどこまでも相續させて載く事と味ますと申上たれば妙仰に、御文章の通りが我了解に成のじや。三首の御詠歌の

通り、一念無疑ニ至心歸命シタマツレバワツラヒモナクソ
ノトキリンジユセハ往生治定スヘシ。モシソノ命ノビナハ一
期ノアヒタハ佛恩報謝ノタメニ念佛シテ畢命ヲ期トスベシ。
コレスナハチ平生業成ノコ、ロナルベシトタシカニ聽聞セシ
ムルアイダ、ソノ決定ノ信心ノトリ今ニ耳ノソコニ退轉セ
シムルコトナシと仰らるれば、耳のそこに忘れられぬのじや。
憶念の信と云は今の心じや、きのふやあとのひの事ではない。
思ひ出す度が今一定じやと。

又問、水の中へはまる時は歸命の一念、乍去其一念の
時刻は覺へ御座有ませぬと申上る。

仰にそれでも今までなかつた心の出來たは覺へは有、疑ひの
なう成た時じや。

答申上る。此爲御聞て無量劫の初言に私が自力を知ら
せて貰ひました。覺は急度有舛。此あたとへて夜が明
た。此直しに預つてから本眞に嬉敗成りました。覺は
有舛。是が疑の時た時也。

又仰に心をつにしてと云は、あなたの御心一つて助るのじ
や。こちらの心は幾つ有てもかまふ事はないと。

私が思ふに、こちらの心は幾つ有ても皆落る物がら、

仰にそれが踊躍歡喜じや、外にはない。極樂參りが壹人出來
た。おれが手柄じやと仰られ、

有難御座います。年久敷御化導を蒙りまして何共御禮
の中上様も御座有ませぬ。是迄は故事計り云て御胸を
いためました事の恐多や。今思て見まするに佛智廻回
のおなし業と云事を知らなんだ故と思はれますと申上
る。

仰に佛智廻回がすめた歟。夫がすめぬ故に久遠劫より迷ふて
居るのじや。しばらく間有てそれでもナアもふいと云て捨
て置くのではないぞよ、聞ては喜び／＼するのじや程にと仰
られ、

有難御座有升。聞けば聞程我誤不冥加が思ひ知られ恐
入る計りの仕合でござります。長居は御病氣にさわり
やせんと直様御いと申。御年八十六才也。

同八月十日御枕元にて申上る。

我は御前へ上りまして同行衆の中でも口ではりつば
に調子合してよろこびますれども、もしやもし心底が
違ふては一大事じやがといふ心配が御座有りますは、
是はいかゞと御尋申上る。

是れが御助に預る物がらと載ます。又憶念とは今の心
じやと御聞せを戴き、よく／＼味へば誠に平生業成と
云事が慥なども／＼、きのふの一定でもなし、今朝の一
定でもなし、頓つと今一定なり。有難や／＼。

又仰に我心より思ひ浮むにあらず、皆御化導よりあらわる、
なり。我心より出るは皆自力なりと。

已八月三日八木嘉殿同道にて、

御講師様(香樹院師也)御病中御枕元に手をつけば、

どうじやどふしたと仰せられ、

私は是迄持ならべて居ました信心も安心もどこいやら
行てしまひ、只今は御呼聲一つが杖にも力にもたのみ
さられる斗りて御座有升と申上、

それがしあふせたのじやと仰られ、

有難ござります。聞付られた上は歡喜の思ひよりない
と兼て御聞せなれ共、私はぞく／＼する様な嬉しい心は
御座有ませぬ。唯仕やう仕方のない淺間敷機様の思ひ
知らるれば、此機ゆへの御成就、此き見込てお與へと
戴けば、ひとり手に唱られて下さる。是斗りてござり
ますが、此外に嬉しい心が出來ますかと申上。

それが信相續のすがたじやと仰られ、

有難御座有升。左様ならば是ながらて往生させて貰ひ
ますのかと申。

往生間近くなれば夫もない様に成ると仰られ、

有難ござります。扱も／＼仕合者でござり升とよろこ
び／＼御いと申。十月十九日一蓮院様へ上り有のま
ゝを不包申上御直しを願候。

仰に、有難仕合事じや。此上は稱へる計りおこたらぬ様に致
されよとの仰。

問、ザンキとサンケとはいかにと御尋申上。

仰に、サンギと云は己が心を己が心に恥入事なり。サンゲと
云は己が罪とがを口にかたりてあやまる事と仰らる。

又問、私は耳が遠ふ御座有升故、いつても御膝先で載ま
すれば誠に私壹人へ御さかせ。私が參りて居ずば此様
な味ひ御爲聞は有まいと思ひます。然是は悪い事で
は御座有ませぬか。何卒御直しに預りとふ御座有升。
仰に、それが聽聞するのじや、そふ成る筈じやと仰。

又申上。私は三年前も五年先も信得た氣持で御同行様
方とも相談して居ましたに、今に成つて見れば我機頼

みて居りました誤が知られ、是程無造作の御謂を知らなんだ事の淺間しや。大願強力の御手柄で佛にして被下る事を何て信ぜなんだやらと後悔致升。よく大切成事有難事が思ひ知られて見れば、御同行様方の御了解の程が心元な思ひますが、是は私が高い所へあがりましてのでは御座りますまいかと申上。

仰に、其心は信心に具して御興へなされて被下たのじや。信の上には壹人成共と思ふ心は御興へ物じやと仰られ候。

十一月四日妙爲御聞に、如來様の御智慧を小さう聞て居から載れぬ。あなたの智慧御慈悲は切限りの有るではない。闇の夜にろうそくをとぼして有るを、十人でも百人でも千萬人とぼしても少もへらず、とぼした程の者は皆我物に成るふがやとの仰。

十二月二日山科にて光西寺様爲御聞。たのむと願ふのを取ちかへて居る。未だ出来ざる事を出來さしたやと思ふが願ふなり。頼むとは向に出来上て有事を聞て、やれく嬉しやと受込なり、落居する也、是をたのむと云。

又即願寺様爲御聞に、たのむから助かるやうに思ふ故後先に成る。御助を聞いて頼むのじや。誓願ふしぎに助られ氣らせて往生をとくる也と信じてと有御助を信ずるのなりと。

時

報

昨年の求道講話

年々歳々巻を改むるに當りて常に感謝に堪えざるは、毎日曜土曜及び月一回の求道學舎及第二第三求道會講話に於て多數の御同朋と共に不可思議の法契を結び奉る事也。殊に信仰談話會の名簿を繙くに至りて、多生曠劫の宿縁を回想したてまつらざるはあらず。顧みれば各其の生郷を異にし、經歷を異にし、且つ境遇を異にするもの、偶々一室の法縁に遇ひ、共に同一鹹味の慈悲海中に歸入する事、如何なる不思議の恩寵ぞや。今や例年の如く其の交名を列記するに當り、吾人をして痛歎愛惜の情に耐えざらしむるものは、西川藤吉、及び菅瀬忠子兩氏の示寂にあり。抑々兩氏の入信の實況若くは信仰生活の告白は昨年本誌に於ける最も著しき光明たりし事は既に吾人の共に鑽仰措く能はざりし所、若し幸にして其生を保ち給はんには、如何に多く信仰界に貢獻し給ひけん。されど斯く思ふも凡情なり。今や既に無漏法性の淨刹に化生し給ひて、却つて苦海に沈淪する我等を觀そなはさん。冀くは蘭林遊戯の徳を顯はして、我等聞法の庭を冥護し給はん事を。

●求道學舎信仰談話會出席人名

近角常觀、大地原誠玄、笠木輔一、長尾收一、小田島德藏、本谷暢香、譽田豐吉、田川茂平治、白井三之助、佐藤兵太郎、松島幹夫、長澤惠海、宇佐美英太郎、宇野圓空、角谷

嘆

咏

哀歌

近く愛兒を失ひし人に代りて

増田 甚

這へは立て立ては歩めと思ふ兒の未だあゆまぬ間に逝きにけり。

甲斐なきことゝは思へとまた同し甲斐なき思ひかりかへしつゝ。

甲斐なき事ぞとなく吾か妻に教へつゝなほ吾もなけかゆ。

母の前にひとり立ち得てうれしけに笑みし面かけ忘れえかねつ。

失ひし子をしかなしむ人を見てかくもと思ひし時もありしを。

御光の中に

吾兒は生まれ、

御光の中に

吾兒はそだちて、

御光の中に

吾兒はゆきぬ、

御光の中に

また生るべく。

八三郎、平野正二、村上義一、杉本哲三、佐伯正、塚原秀峰、小澤一、田邊晋八、山内鷲、銀田界雄、蒲田良三、永待石之助、橘川光子、佐藤直丸、島田廣慧、藤川若松、角眞壽雄、前川勇市、堀勘槌、酒井宗三郎、城榮、田中たつ若林くさ、兒玉信義、松崎壽三、牧田平太郎、光本寛隆、淨川澹、柴田さよ、今井せい、自在丸伊恵子、菅瀬忠子、丸茂むね子、丸茂文子、本谷すむ、加藤せい、姉崎そて子、白鳥吟子、龜岡小歌、長尾加壽子、神谷三郎、清水大英、佐藤清一郎、於保介藏、三井甲之助、香川靜爾、渡邊順、安村行雲、小笠原谷、雄井半二、近角さそ子、松島波、石井正祐、古泉幾太郎、石川しげ、徳永郁、賛川長江、岡部民子、角谷すま、有馬饒子、碓氷はる、岩井三子、津田野敬一、北條懿督、關原忠三、松本謙吉、仁木信夫、須藤堅正、高崎堅三郎、山本泰一、有田義之介、山下汎、増田甚治郎、水澤富藏、佐伯頼治、齋藤教慧、岩水利、近角常音、八木沼源八、塚原幾子、園千鶴子、藤野君枝、大塚菊枝、西川藤吉、鷹屋祐攝、岡田菊僊、瀧澤三郎、信樂隨縁、加藤爲吉、中村祐海、平木熊一、讃井潤爾、佐藤貞吉、光澤顯瑞、小笠原覺雄、井上玄一、生島龍徳、長沼賢海、井口政能、木村のぶ、豊原清作、豊原繁子、上田定次郎、桐野梅、末廣恭二、松田益太郎、小林昇、清水隆道、木谷興作、沼波政憲、太田貞己、葦原雅亮、松井琢磨、葦原よしの、佐々木博、日野亮、林善次、圓山正意、銀田花、小林つた丸茂猛、横尾惣三郎、時友仙治郎、小栗捨藏、森弘、石川慈恵、金哲治、中野伴三郎、湯澤幸吉郎、日野顯正、山田

近角常觀著書目

雅介、井口乘海、松九次郎、綾部康雄、田中治八郎、小出集、小林權右衛門、上野多、竹原靜、木村ため、塚原子支、永井ぬい、戸野廣ふさ、村上政代、佐野川たね、佐野川信夫、菊池公導、宮澤説成、柄澤真成、磯部教誓、三木義久、深永清、梅村舜道、柿原慈乘、中郎精一、桑原隆旭、小田島信一郎、小倉蘭教、西本龍山、菊池直、能勢一、太田七造、淺野孝之、佐々木慶成、山田善太郎、名取篤、竹原嶺音、太子堂諦忍、由雄なほ、寶岡かま子、楠原豊子、小澤、山崎むら、前田あさ、佐藤とくよ、弘中靜枝、松下よう、西川みね子、岩永法電、柳井覺善、杉野淺治郎、勝沼精藏、荒川慈圓、大佛衛、山邊習學、中島眞孝、安田巳忍、神保達見、日高清珊、野田諦聰、福島たき、生沼さく、綾部りく、川村貞治、七尾忠太郎、藤村三次、秋岡一貫、吉田伴一郎、尾野敏男、向坊久五郎、冠松次郎、新井正三、杉崎大愚、川上法勵、高橋惠真、菅原廣濟、前田義太郎、野崎公義、富岡教雲、龜谷凌雲、谷内正順、岩永恒、宇野いね、横田松子、須山隆九、徳永てる、深菅龍、白土勝治、谷口次三郎、佐藤要人、加藤末吉、加藤たの、居本道圓、高島藤作、栗田ひさ、

●第二求道會信仰談話會出席人名

近角常觀、吉田宗次郎、織田千代九、於保介藏、大井庄太郎、長澤惠海、綾部康雄、小島吉藏、松崎壽三、月洞善讓、下田一喜、開定次郎、上坂勝海、殿邑増太郎、廣瀬正道、中村清市、小澤一、田代隆松、平木熊一、小笠熊谷、寺井庄太郎、山村房次郎、月岡長次、高崎堅二郎、桑土一任、

豊田琢定、香春建一、森弘、磯部てい、木村俊治、鈴木ふじ、村田榮、徳永郁子、丸山ふゆ子、横田松子、小澤はる森山義勝、御手洗芳祐、垣之内軍家、黒田政太郎、藤井孫十郎、關二十郎、古賀忠次郎、長尾收一、土屋森圓、葦原雅亮、細田長之助、原鶴次郎、平長悦、佐々木博、村田金一、寺松定六、栗真峻、野原たか、金森葉留、福本謙次郎、吉岡茂、上野えい、豊原しげ、松崎源造、高世喜内、山名ちる、上原れい、園千鶴、長尾加壽、田中作二、野村正治、田中克明、大久保魁、室谷修、佐藤淺吉、尾野敏雄、小林昇、柳澤陸恵、那須凌袋、老野生成章、吉岡清光、吉岡俊亮、笹川甚一郎、太田貞己、深永清、太田七造、矢部たみの、牧野孝、柿原慈乘、及川銀太郎、瀧澤三郎、白鳥たつ、鶴藤子、自在丸伊恵子、福田ひな、引地高庵、西本清人、須藤堅正、山田みよ、須山隆九、田代たみ、眞島丹吾母、新井正三、岩永法電、生沼さく子、

附記

前年度本誌總目錄本號に添ふべき筈に候へ共、紙數増加の爲め次號に廻はし候也。

親鸞聖人の信仰

冠頭 歎異鈔

本書は嘗て本誌に連載せる眞宗慶應に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

冠頭 唯信鈔文意

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに植へ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき要文を引用し、叮嚀懇切に作りたるものなり。

懺悔錄 附錄「歎異鈔」

本書は著者が實験の信仰に基づき、古來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救済の眞意義を闡明せんが爲に編纂したるものにして、著者は先づ自己の経験に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後佛に歸依の慈光に接して人生の黒闇が一掃せし得給へる某天の實例に見、人間何人とも如來慈光の下唯一救済の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ懺悔錄の名ある所以にして、一讀入信の人少からず。

第貳版 定價 七十錢
小包料 八錢

第四版 定價 五錢
郵稅四冊迄二錢
部數に應じ充分割引す

新版 定價 七錢
郵稅三冊迄二錢
部數に應じ充分割引す

第六版 定價 二十錢
郵稅貳錢
袖珍美本

▲「人道講話」は教育的方面の講話を掲載す
▲「人道講話」は宗教的方面の講話を掲載す
▲「人道講話」は道德的方面の講話を掲載す

人道講話

(第一號) 定價 金六錢 郵税 金七厘
發行所 東京小石川區丸山町 人道講話會
發行日 一月一回 五日發行

主義

◎發刊の辭……文學博士村上專精
◎主義綱領……文學博士村上專精

講話

◎修養談……文學博士村上專精
修養の意義——修養の必要なる
所以——修養の原理——修養の分
類——修養と教育——修養と宗教
修養の目的——修養の結果

雜錄

◎感話……文學博士村上專精
◎本誌の前身は「同朋也」……
……岩上行坡
◎外數件、報道、廣告

發行所

東京小石川區丸山町
人道講話會

人道講話會

會員募集

人道講話會規約

- 一、本會は教育宗教及び道德に關する講話を直接又は通信に依つて聴かんと欲する者を以て組織す
- 一、本會本部は東京市小石川區丸山町東洋高等女學校内に置く
- 一、本會は文學博士村上專精氏を推して會長とし、其他幹事一名事務員若干名を置く
- 一、本會は本會の目的を達せんがため毎月一回講話會を開き、雜誌「人道講話」を發行す
- 一、本會は何人をも選ばず入會を許す
- 一、本會に入會志望の者は住所姓名を記し、一ヶ年以上の會費を添へ本會本部に申込むべし
- 一、但し會費一ヶ月金五錢一ヶ年金六拾錢とす、(爲替は巢鴨局指定のこと)
- 一、本會々員には毎月一回雜誌「人道講話」を無代にて配賦す。

人道講話會

東洋大學講師 釋清潭先生著

寒山詩新釋

(第三版)

定價金 五十錢
郵税金 八錢

是れ佛か是れ仙か是れ狂漢か得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることを著者精深雄大なる學と才とを以て一筆句斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

文學博士 村上專精先生著

改訂 自信錄

(第六版)

定價金 六十錢
郵税金 八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奥底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否を明にし」實在と我れ「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし今や第六版を發行するに當り更に先生の改訂増補を得て先生の信仰に一大進歩あることを證したるのみならず全然舊版と面目を異にするを得たり冀くは再讀の榮を賜へ。

堂聲鷄

町原川石小京東
三五三一京東貯

社版出午丙

町原區川石小京東
六八六五一京東貯

真宗京都中學教授

安藤州一

先生著

歎異抄十回講話

定價六十五錢

求道讀者郵税不要

歎異抄は親鸞聖人信仰の結晶にして、その一言一句といへども、聖人實感の湧出にあらざるはなし。平易其意の深遠なるに、至る體讀するに非ず、眞髓を得ること難。本書は、著者が常、一年間十回、互に時代智識の下、他力信仰の極致を宣傳し、青年求道者を指導せし、或は古今聖賢の言行を援引し、東西史乘の逸事を例證し、精彩陸離著者の心琴に觸れ、實驗の聲に非ざるはなし。一聖人影向直ちに其德音あるべし、今や聖人六百五十回の遺思、目睫の間に迫れるに際し、本書の出づる蓋し偶然に非ざる也。

安藤州一先生著

安慰錄

好評第二版出來
定價貳拾五錢
求道讀者郵税不要

布教界空前絶後の新提

新案説教大家
田淵靜縁
師立案

布教大辭典

製本堅六寸巾四寸三分全文五號活字 平假名振假名付總布クロス表金文字入堅牢洋綴美裝二千頁内外
定價金五圓

●特價金參圓五拾錢 郵税貳錢
●特價期限 明治四十三年二月
期限經過後は定價に復す ●前金に限る ●製本即時送本

新進布教家必携の良顧問

前田博士題字 近角常觀序

泉文學士叙傳 故菅瀨夫人日誌

よろこびの跡

紙數二百餘頁
定價廿錢
郵税二錢
十部以上割引

右は本誌前々號及前號の告白欄に其一部を掲載せる故菅瀨令夫人の日誌全部を輯録して、今回紀念の爲め印刷發行、知人間に配分せられたる者に候。猶ほ殘部有之候に付、有志の諸君は御申込相成り度く、最も夫人の日誌が飾るなく、偽るなく信仰より來る實生活其儘の告白なる事は、既に本誌にて御承知の通りに候。若し全體を通讀せられ候は、如何ばかり有難き事ならんと存候。右謹告候也

發行所

東京市本郷區東片町一三八

同和學園

申込所

東京市本郷區森川町一 振替口座一六六九六番

求道發行所

規定

- 一 本誌は毎月一回十五日發行とす
- 一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 一 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一 凡て送金受取人名宛は「東京市本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十三年一月十五日印刷
明治四十三年一月十五日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町
東京堂

發行所 京電大 都話阪 市二座 東五七 六八四 條番 館藏法

前號要目

求道

◎眞人生

自啓

◎歳晩の感謝

講話

◎信疑の得失

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第卅六 埋れる金

第卅七 恐しき地獄

近角常觀

雜錄

◎近時思想界と信仰問題

近角常觀

◎徹底せざる人生觀

近角常觀

告白

◎是非善惡の分らぬ汝を惑む本願也

岩永法電

講義

◎歎異鈔——第十二章

近角常觀

紹介

◎愚禿親鸞◎花つみ日記

時報

◎臘月思海